東京学芸大学全国同窓会機関誌

辟雍

HEKIYOU

2012年
第9号

辟雍９号 目次

会長挨拶「文学的構想力・歴史的構想力」鷲山恭彦……3

栗山英樹 日本ハム監督、ついに優勝
北海道支部の激励会が奏功……4

女子駅伝チーム「スターツ」３人娘を訪ねて……6

表紙の人 日本画家 越智波留香さん インタビュー……10

ホームページ再録「会長室から」

倉本 聰さん……14

杉本淳子さん……18

林 四郎さん……20

地方支部からの報告……26

各部の活動報告……30

理事会報告……32

ホームカミングデーのお知らせ……34

あとがき……35

表紙の人　越智波留香さん　　P10 に取材記事

表紙絵：越智波留香作「凪」/ サイズ：P100 号
制作年：2012/ 素材：三椏紙・胡粉・墨・群青・木炭・雲母

背景画像は、本学理科棟南側の杉の木

文学的構想力・歴史的構想力

辟雍会会長　鷲山恭彦

自分の感性や知性が、どれだけ現実の深みに迫り、生産的ベクトルを探り当て、よき変革につなげて行けているのか。そう思うとき、最近はとりわけ、自分の発想や思考パターンを反省的に考えさせられることが多い。

地域で学校評議委員やボランティアをしている。私のように「モダン」に憧れて都会に出ていった者が、再度、郷里に戻って地域活動すると、自分の近代主義とか合理主義が浅薄で、人々の民主主義とぶつかってしまうことに気がつく。

今どきの父親や母親と交わりながら、そして地域の伝統や古層にもふれつつ、どのように問題を提起し実践していくかだが、どちらにとっても、自分の発想が上からのパラフレーズ路線であり、表層的で、根源に触れていないと感じさせられる。

私たちの思考方法は、新聞とか、テレビとか、雑誌などの知的媒体に大きな影響をうける。こうした流通観念ではなく、精錬された現状分析や実践的展望を知ろうと、中央教育審議会や学術会議などの答申を読んだりもするが、しかしここでも表層の社会学的な発想とでもいうような、似たような思考パターンが支配している。社会認識や現状分析が、本質にふれていないと感ずるのは、それだけ時代の裂け目が深いからであろうか。

倉本聰さんの最新作『明日、悲別で』を見た後、久しぶりに倉本さんとお話しする機会があった。倉本さんは、現状を討つ形で、「論ずる人間」と「根源の人間」という立て方をされ、近代に侵されない原人類の立場から今の社会を見つめ、知の在り方や生き方を転換していくことの大切さを言われた。腹の据え方、根源から人間と社会を問う姿勢・・・お話しを聞きながら、演劇的・文学的な発想の射程と生産性について考えさせられた。

地域に入って学校について思うことは、校長は3年くらいで変わるし、教員もそうで、地域と学校を定点観測できる教員がいないということである。しかし教師集団と校長は、その時々、高揚した時をもち、良き実績を残している。そうした歴史的経験の反芻は皆無で、常に当面の必要についての議論となる。これはもったいないことだ。

伝統と革新といったとき、伝統に学んで革新するとは、過去の最盛の時のエレメントをいかに受け継ぐのかに尽きることに気づく。最近やっと学校評議会や地域本部の活動によって、学校と地域の経験の蓄積が可能になりつつあるのはよい兆しである。危機の時代だからこそ、隆盛時のエキスは原点にもなり、自分がどの段階にいるのか、どこへ進むべきかの羅針盤にもなる。これはどんな活動にも組織にも言えることである。

表層の流通観念ではなく、人間と社会を根源から捉える文学的構想力、最盛の時から学ぶ歴史的構想力の大切さを思うこの頃である。

栗山英樹氏ついにやった
北海道支部の激励会が奏功

2012年10月3日【水】 第22809号 （1）11版B

スポーツニッポン

就任1年目V

栗山

ファンと舞った

ハム

試合なし札幌Dグ

「北海道が1番になりました!!」

舞った、心で泣いた。優勝へのマジックナンバーを1としていた日本ハムは2日、2位西武がロッテに敗れたため、3年ぶり6度目のリーグ優勝を決めた。就任1年目の栗山英樹監督(51)が、異例の無料開放で1万人を超えるファンとともに待機していた札幌ドームで宙に11度舞い、北の大地に大輪を咲かせた。絶対エースのダルビッシュが抜けたことで戦前の下馬評は低かったが、若手の潜在能力を引き出した新人監督の手腕で見事に覆した。その栗山監督が本紙に独占手記を寄せた。

西武敗れて決定

"泣き虫監督"

笑いっぱなし

眠れぬ夜もあったけど

対話と気配りで

選手鼓舞

栗山監督独占手記2面 日本ハム優勝ワイド7ページ

洗練されたクリアな味、辛口。

SUPER "DRY"

Asahi

栗山英樹氏がついにやった。２０１２プロ野球は国立大学出身の監督が初めて誕生した、と栗山日本ハム監督の話題でもちきりだった。しかし、その栗山監督の采配に関しては「未知数」。正直のところ優勝争いに絡んでくると予想した関係者はほとんどいなかった。にもかかわらず、栗山監督はペナントレースを着実に戦い抜き、パリーグ優勝という快挙を「やすやす」とやってのけた。その勢いでクライマックスシリーズも全勝で乗り切って、日本シリーズへと駒を進めたのである。

上に掲げたのは、日本ハムのリーグ優勝を報じる10月３日付の「スポーツニッポン新聞」の１面である。日本ハムナインに胴上げされる栗山監督の破顔一笑の顔の脇には「北海道が１番になりました！」の白抜き見出しが躍っている。そして本文の記事は次のように綴られている。

……舞った、心で泣いた。・・・２日、２位西武がロッテに敗れたため、３年ぶり６度目のリーグ優勝を決めた。就任１年目の栗山英樹監督（51）が、１万人を超えるファンとともに待機していた札幌ドームで宙に11度舞い、北の大地に大輪を咲かせた。・・・若手の潜在能力を引き出した新人監督の手腕は見事に（戦前の下馬評を）覆した。……

栗山ＯＢの見事な優勝には、辟雍会も手放しで喝さいを送ろう。ただ、同氏の活躍の裏には辟雍会北海道支部の激励会が、大いなる後押しの力になっていたことは、スポーツマスコミも知らないに違いない。ここで北海道支部の報告を掲げたい。

「栗山英樹氏日ハム監督就任激励会」

北海道支部からの報告

8月5日　札幌チサンホテル

当日、札幌ドームは3万5千人を超えるファイターズ・ファンで埋め尽くされていました。試合は「延長12回引き分け」という、采配を振るう監督にとってはエネルギーを使う展開でしたが、随所に栗山監督の緻密さと指揮官としての情熱が感じられ、「北海道視察団」と鶴丸会長ら支部役員のメンバーは、観戦を通して十分に応援することができました。

監督は、過密なスケジュールにも関わらず、試合後のミーティングを済ませ、直ちに激励会に駆けつけてくれました。挨拶から伝わってくる誠実な人柄と野球に対する真摯な姿勢とともに、ジョークも混じえた歯切れの良いトークは参加者一同を魅了し、会場は大いに盛り上がりました。そして、質問コーナーでは、監督就任に際しての覚悟、注目度の高い人気選手の起用方法、監督業の厳しさと醍醐味など、新聞やマスコミ報道だけではわからない貴重な話も披露してくれましたが、特に印象に残ったのは、組織のリーダーとしてチームを牽引していくためには、選手やコーチとのコミュニケーションを通して信頼関係を築き上げながら、選手一人ひとりの可能性を信じて鍛え伸ばすことが何よりも大切であるなど、「教育」の世界と相通ずる内容が多くあったことでした。

プロ7年間で通算2割7分9厘、ゴールデングラブ賞受賞という実績に加え、引退後の解説者・スポーツキャスターとしての活躍は周知のとおりです。そして、東学大の講師を務めながら少年野球の普及育成に努めるとともに、平成4年からはスポーツメディア論などを専門分野として大学教育に携わってきました。その豊かな経験と確かな理論に裏打ちされたバランスのとれた指導スタイル、そして何事にも前向きに挑戦する行動力は、これからの社会で求められる新しいタイプの指導者の姿に相違ありません。栗山監督の活躍は各方面から注目されているところですが、求め続ける指導者としての根底には、東学大で学び培った「教育」に対する確固たる信念があるように強く感じました。

「激励会」での栗山氏の発言要旨

・選手に対しては常に「北海道に根ざしたプロチームの一員ということを自覚し、北海道を愛し、道民に夢や希望、勇気を与える選手たれ」と口をすっぱくして言っている。

・選手、投手の起用方法について、マスコミやファンからもよく指摘を受けるが、監督とはいえ、すべてが自分の思い通りになるとは限らず、むしろその逆の方が現実である。

・稲葉選手はファンに愛されている通り素晴らしい選手である。私が監督として言うべきこと、言いたいことのほとんどを彼が若手選手にアドバイスしてくれるので、本当に助かっている。彼が監督業務の一部を担ってくれているといっても過言ではない。

・東京学芸大学における大学生活が、プロ野球監督となった今でも、自分のベースになっている。大学生活と言うものは、今振り返っても本当に大切かつ貴重な時間だった。

・教育の勉強を重ね、教員免許を持つ者として、常日頃から選手には接しているし、他の監督とは違った経験を積んできたという誇りは持っており、これからも大切にしていきたい。■

各写真はイメージです

「スターツ」3人娘を訪ねて

実業団女子陸上に「スターツ」というチームがある。本拠地は千葉市。千葉港にほど近い美浜区に合宿所を構えて、8人の選手が日夜研さんを積んでいる。その8人の選手のうち3人が東京学芸大学のOGである。実業団女子チームは全国に30以上あるが、同じ大学出身者が3人も固まっているというのはスターツだけである。学芸大側から見ても同じチームに3人ものOGがいるというのはすべてのスポーツの実業団チームでもスターツだけであろう。

そこで駅伝シーズンを間近に控えた秋のある日、千葉市の合宿所を訪ねて彼女たちにインタビューし、さらに練習を見せてもらった。以下、そのインタビューを中心にした陸上部OGの活躍ぶりのレポートである。

左から土井、西尾、牧原の各選手

―まず3人順番に、卒業年次順に、自己紹介して下さい。

西尾　西尾千沙です。大学は四年でちょっと寄り道をしたので、２００７年九月、L類の生涯スポーツ卒業です。今はこのL類と言うのはなくて、私と牧原だけ。土井は同じ生涯スポーツでもG類といいます。出身は静岡の沼津西高です。

牧原　牧原幸子です。西尾先輩と同じL類生涯スポーツを２００８年に卒業しました。西尾先輩と一年違いの卒業みたいですが、実は私が入学した時、西尾先輩は三年でした。出身は広島県の安古市（やすふるいち）高校です。

土井　土井友里永です。２０１１年３月、G類芸術スポーツ課程生涯スポーツ専攻を卒業しました。といっても東日本大震災の影響で卒業式が中止になって、卒業式で卒業証書もらっていないんです。出身は千葉県の成東高校です。

―L類とかG類とかいわゆるゼロ免課程なのかな。みんな教員免許は持っていますか。

三人　はい、持っています。

―では、みんな教員になりたくて学芸大に来たのですか。なぜ学芸大を選んだか教えて下さい。聞けばみんな地方出身で、それぞれの出身地に優れた教育学部を持つ大学があるのに、あえて学芸大に来た訳は。

土井　私は体育の先生になりたくて学芸大を選びました。実は父が高校の商業の教師をしておりまして、また剣道の指導をしていましたので、小さい頃から自分は体育の教師になるものだと、決めていました。陸上は中学からやっていて、高校も陸上の強い市立船橋高に行きたかったのですが、家から通える成東にしました。大学は千葉大は最初から考えなくて、というのは大学駅伝に出ている学校に行きたかった。そうすると筑波大か学芸大と言うことになります。両方の学校を見に行ったのですが、学芸大の緑に囲まれた雰囲気が気に入りましたし、校内にある一㌔の練習コースと言うのも魅力でした。それで学芸大に決めたのです。

牧原　私も教員になるつもりで来まし

た。というのは父が小学校の教師をしていまして、兄も教育系の仕事をしております。また、土井さんと同じように大学駅伝に出ている学校に行きたかった。広島大はメンバーもいなくて駅伝に出ていないので選択肢に入りませんでした。

西尾　教員免許を取るという目的もありましたが、それよりもマイルリレー（1600㍍リレー）に強い学芸大が魅力でした。私が入学するまで学芸大はマイルリレーで三連覇していたのです。もともと私は短距離で、400㍍ハードルが専門種目でした。そこでリレーの強い学芸大は魅力でした。それと関東インカレに出られるというのが、大きな魅力でした。静岡大だと東海インカレになるので、やっぱり関東ですよね。

——それで学芸大のインカレ四連覇どうなったのですか。

西尾千沙選手

西尾　一年から出させて貰ったのですが、負けました。日体大にわずかの差で阻まれたのです。それで私のいた四年間はとうとう取り戻せませんでした。それでも私個人としては四年間で何度か関東インカレの表彰台にも立たせてもらえましたし、学芸大に来て本当に良かったと思っています。

——それぞれに学芸大に期待を持って入学したようですが、入って見てどうでしたか。思った通りだったでしょうか。

西尾　本当に自由にやらせてもらいました。たぶんそれが学芸大の売りだったのではないでしょうか。今はそう思うのですが、学生時代は指導に飢えていたと言えます。もっと厳しく指導してほしかった。でも学芸大は違うのです。よくいえば自主性に任せる、悪く言えば放任主義と言うのか。だから今の自分がいるのでしょうけどね。

牧原　私も西尾先輩と同じで、監督がいて、練習メニューがあって、と思って入ってきたのですが、そういうものはありませんでした。長距離ブロックは先輩が中心で週一回ミーティングをやって、あとは自分で考えて練習をする。今思うとその経験は貴重なものでした。逃げようと思えば逃げられるけれど、自分との闘いですね。

牧原幸子選手

——それで、成績はどうだったのですか。

牧原　学生時代は目立ったものは何もありません。私は長距離、マラソンランナーになりたいと思っておりまして、学生時代、2年と3年でホノルルマラソンを走りました。また東京国際女子マラソンにも出場しました。成績は2年の時が一番良くて2時間56分ぐらいでした。卒業後名古屋女子マラソンにも挑戦しましたが、3年前のタイムが自己ベストで2時間36分、15位でした。

土井　私は先輩たちと違って、自分で強くなろうと思っていましたから、学芸大の練習はぴったりだったと思います。高校もいわゆる強豪校ではなくて、練習メニューのようなものもありませんでしたし、自分でメニューを作ってやっていましたから。でも実際は大変に難しかった。大学1～2年の時はまったく結果が出なくて、自己ベストも出ないし、練習メニューを自分で作るというのも難しくて、本当に苦しい2年間でした。それでも3年になるとようやくリズムが自分にあってきて、4年では自己ベストも出せて、表彰台にも上りました。

——土井さんの専門種目は何ですか。

土井　1500㍍と5000㍍です。こういうセットを組む人はあまりい

インタビューに答える（左から）西尾選手、土井選手、牧原選手

ませんね。大学時代からそれでやってきたのです。1500㍍のスピードを5000㍍に生かす、という考え方なのですが、たいていは1万㍍と5000㍍をセットにする人が多い。私は1500，5000というセットにこだわっているのです。

牧原　マラソンもスピードが要求される時代ですし、マラソンランナーも1万㍍のスピードがないと2時間半を切るタイムでは走れないし、世界で戦えるところにはいけないですから。

――土井さんは将来マラソンを走って見たいという気持ちはないの。昨年の全日本女子駅伝では1区（7㌔）でいきなり第一生命の尾崎好美選手とトップ争いを演じて華々しいデビューを飾ったわけだし。尾崎と言えばロンドンオリンピックのマラソン代表ですし、日本を代表するマラソンランナー。その尾崎と五分に渡り合ったのだから、マラソン志望なのかと思いましたが。

土井　今はマラソンは全く考えていません。競技をやめて趣味で走るようになったらマラソンをやってみようとは思いますけど。

――ところで学芸大ＯＧスターツ3人娘は、まず西尾さんから始まったわけですね。西尾さんはどんなきっかけでスターツに入ることになったのですか。

土井友里永選手

西尾　卒業後、実業団で競技を続けるということは思っていなかったのですが、大学で400ハードル以外に800㍍もちょこちょこ出ていたのですが、それをスターツの前監督が見ていて下さって、実業団でやってみないかと誘って下さった。それがきっかけです。それでいつの間にか、チーム最年長の二十九歳になってしまいました。

――牧原さん、土井さんは西尾先輩がいるからスターツに入ったのですね。

二人　そうです。

――実業団での競技生活と言うのは、大学時代とはずいぶん違うと思いますが、三人それぞれに今後の抱負、夢も含めて語って下さい。

西尾　実は今また故障をしていまして、ここ二年ほどろくな成績を残せていないので、ともかく走れる身体にすることです。そのうえで、5000，1万も走れる選手になりたいですね。駅伝も短いところ、長いところ、両方走れるようになりたいです。5000㍍で15分そこそこで走りたいですね。

牧原　駅伝をきっちり走れるようになることです。マラソンの夢は日の丸付けて走ることですね。目標は三井住友海上の土佐礼子選手のような選手になること。スピードがないとかいろいろ言われながら、ひたひたと走って、それで最後は勝つという土佐選手の走りが好きでしたし、憧れです。

土井　高校時代は同学年の女子選手は私一人でしたし、大学でも誰かに管理されるということもなく、一人でやってきた。それがこのスターツに入ってからは、管理された食事と寮生活ですし、そのおかげで体重も5㌔減るなど、体も変わってきました。練習量も学生時代とは比べ物にならないほど豊富です。だいたい昆明（中国）合宿など、学生には考えられないような環境でやらせてもらっています（実はこのインタビューの後すぐ、スターツチームは一カ月の昆明合宿に旅立っていった）。私の場合、高校から直接実業団という道もあったのですが、学芸大に進学しました。あの学芸大の4年間があったから今があると思っています。

今の目標は駅伝（東日本、全日本）で区間賞を取ること。そうすればチームの入賞というのも見えてくると思うのです。トラックでは5000㍍で日本一になることです。

――最後に三人とも教員免許を持っているということですが、将来、教員になるということは考えていますか。

西尾　教員採用試験に受かる自信はないので、たぶん教員という道はないでしょうね。

牧原　私も本採用は無理だと思います。ですから非常勤講師のような形で子供たちに接することができたらいいな、とは思っています。

土井　私も今の自分では先生になれないと思います。もう少し成長して、中学生や高校生に伝えられるものができたら、やりたいなと思います。

――貴重な時間を長く割いて下さってありがとうございました。活躍に期待しています。

＊＊＊

この後、チームの車に分乗して合宿所から10分ほどの千葉市中央区にある青葉の森公園での練習を見学させてもらった。同公園には陸上のトラックが2面あ

るほか、野球場、テニスコートなども整備されている。また緑に囲まれたジョギングコースなどもあって、千葉市民のよきスポーツ公園になっている。

この日のスターツチームの練習はトラックではなくて、競技場周辺のロードコース（1周約1㌔）をペースを守って走るというものだった（負傷している西尾選手は欠場）。牧原、土井の2選手は他のチームメイト3人と1周4分20秒前後のペースを正確に守って周回を続けた。時折トップを入れ替えながら、まったく時計のように正確な走りである。このペース走は1時間以上続いた。まったく見事なものである。

その練習を見守っていた山口千代子監督は、「学芸大出身の3人は本当にまじめでよくやっています。駅伝でなんとかいい結果を出したいのですが、なにしろ選手は8人しかいないので、なかなか難しいところがあります。学芸大出身選手は我がチームの中心です」と目を細めていた。

（取材・インタビュー　遠藤 満雄）

スターツコーポレーション（株）

スターツアスレチッククラブ（陸上競技部）は、スターツコーポレーション(株)に属する企業チームである。親会社は「総合生活文化企業」と銘打っており、その会社案内には、建設・不動産・管理事業、ホテル・レジャー・物販事業、出版・メディア事業、不動産ネットワーク事業、セキュリティー事業、高齢者支援・保育事業、金融・コンサルティング事業、海外事業の八つの事業で「スターツグループ」を形作っている、とある。本社は東京都中央区　日本橋にある。

マラソンの「コツコツと積み重ねた努力が着実に実を結ぶ」「それぞれのペースでゴールを迎える」というイメージが、スターツの企業理念、経営姿勢と重なるということから、2000年に「陸上競技部」を創設したのを始め、東京マラソンや全日本大学女子駅伝のスポンサーになっている。

青葉の森公園で練習に励むスターツのメンバー。　左端が土井選手、中央先頭を走るのが牧原選手

スターツ陸上競技部パンフレットおよびホームページにある3人のプロフィール（自己記録）

西尾千沙 (Nishio Chisa)
- 入社年　平成18年
- 世界クロカン2009年日本代表
- 800㍍　2分08秒04
- 1500㍍　4分17秒97
- 3000㍍　9分05秒24
- 5000㍍　15分54秒55
- 3000㍍SC　10分05秒43

牧原幸子 (Makihara Yukiko)
- 入社年　平成20年
- 5000㍍　16分02秒77
- 10000㍍　32分52秒35
- 3000㍍SC　11分11秒00
- ハーフ　1時間12分56秒
- マラソン　2時間36分11秒

土井友里永 (Doi Yurie)
- 入社年　平成23年
- 1500㍍　4分27秒20
- 3000㍍　9分33秒86
- 5000㍍　15分37秒32

表紙の人

日本画家

越智波留香さん

「辞雍」９号の素敵な表紙絵は「越智波留香さん」の作品です。越智さんは２００７年に東京学芸大学大学院の日本画研究室を修了された日本画家です。別掲の「略歴」（ご本人の制作）を御覧いただければ分かる通り、卒業後も精力的に展覧会（公募展、個展）に出品され、各方面から高い評価を獲得しています。

表紙を飾っていただいたのを機会に、越智さんにインタビューしました。その内容と共に越智さんの作品を特別に掲げたいと思います。

——日本画を学ぶには美術の専門大学など多くのコースがあると思いますが、東京学芸大学の美術科を選ばれたのはどうしてですか。

越智　進路を考えるにあたり、もっと絵を学びたいという意識はあったのですが、美術だけを専門的に学ぼうという意識とは少し違っていたのです。美術系の進路を考えて受験準をしていたのですが、みんな美術大を目指す中で勉強するうちに、自分は周りとちょっと違うなと気付き始めました。美術そのものというより、むしろ美術を手掛かりに、大学という場で幅広い教養を深めたいという気持ちの方が強かったのです。そこで東京学芸大のことを調べたら、教育学部で、様々な学科があり、授業も自由に受けられるようで、幅広く自分を磨ける学校だと思いましたので、惹かれました。

——学芸大の日本画と言うのは知名度は高くないでしょう。

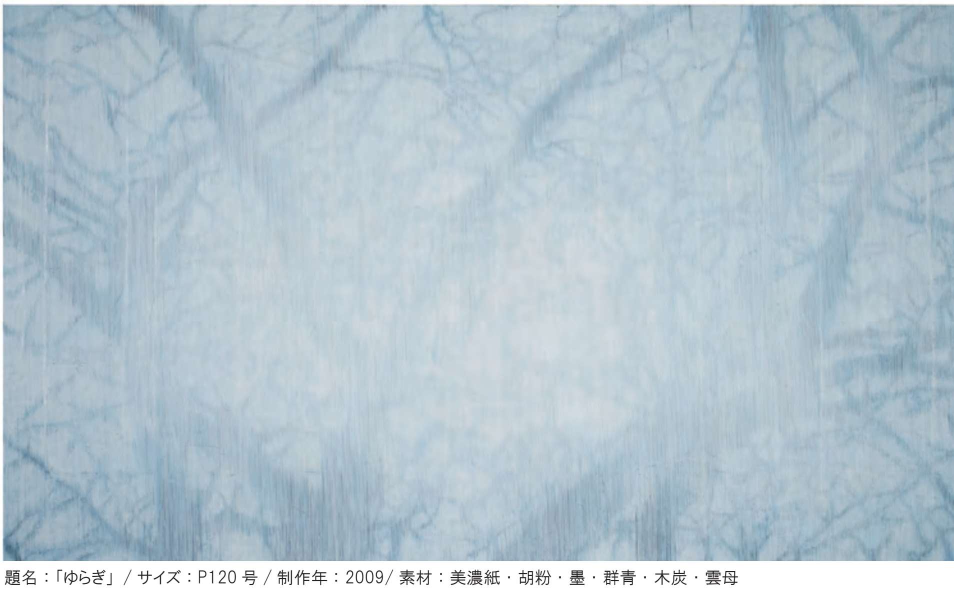
越智　はい、学芸大の知名度は低かったです。一般には美術科があることも、まして日本画科があることもはじめは私も知りませんでした。絵を志していた周りの人たちはみんな美術専門の大学や芸大（東京芸大）を目指し、私も最初は同じように考えていましたが、前述のように次第に自分のやりたいことは違うと思い始め、少し離れた所から美術の世界を捉えたいと思うようになり、そのコースからは外れました。真っただ中にいると却って見えないと感じたのだと思います。美術の中から美術を見るのではなく、少し斜めから、違う世界から眺めたいと思いました。

——学芸大は美術科のどういうコースを選ばれたのですか。

越智　G類です。G類というのはいわゆるゼロ免課程で、教職課程よりも美術の専門性が高い課程です。ただし教員免許状の取得は任意のコースです。

——ということは教員免許は持っていないわけですか。

越智　はい。学部は教員を目指してはいませんでしたのでそういう形で卒業しました。でも、大学院に進んでから教員を目指す同級生に出会ったり絵画教室で教師のアルバイトをしたりするうちに、やっぱり教員免許も取りたいと思って、



題名：「ゆらぎ」/ サイズ：P120 号 / 制作年：2009/ 素材：美濃紙・胡粉・墨・群青・木炭・雲母

越智　波留香（おち　はるか）略歴

1980 年　東京都出身

東京学芸大学大学院教育学研究科美術コース修了

＜個展＞

2007 年　村松画廊

2008 年　MUSEE F

2009 年　ギャラリー坂巻

2011 年　ギャラリー坂巻「－水の記憶－」

2012 年　MUSEE F「－畔（ほとり）－」（画廊選抜展）

ギャラリー坂巻「－廻（めぐ）るもの－」

＜グループ展等＞

2004 年　日本画研究室卒業修了制作展（佐藤美術館）

2005 年「東洋画の次世代展望」高麗大学東洋画専攻・東京学芸大学日本画研究室国際交流事業（東京学芸大学）

2007 年　日本画研究室卒業修了制作展（佐藤美術館）

日韓交流展 The Monochrom（韓国・高麗大学）

2008 年　美楽舎マイコレクション展

2010 年　表参道画廊選抜日本画二人展（表参道画廊）

2011 年　船橋現代美術展ーアラカルトー（船橋市民ギャラリー）

My your precious pieces（ギャラリー坂巻）

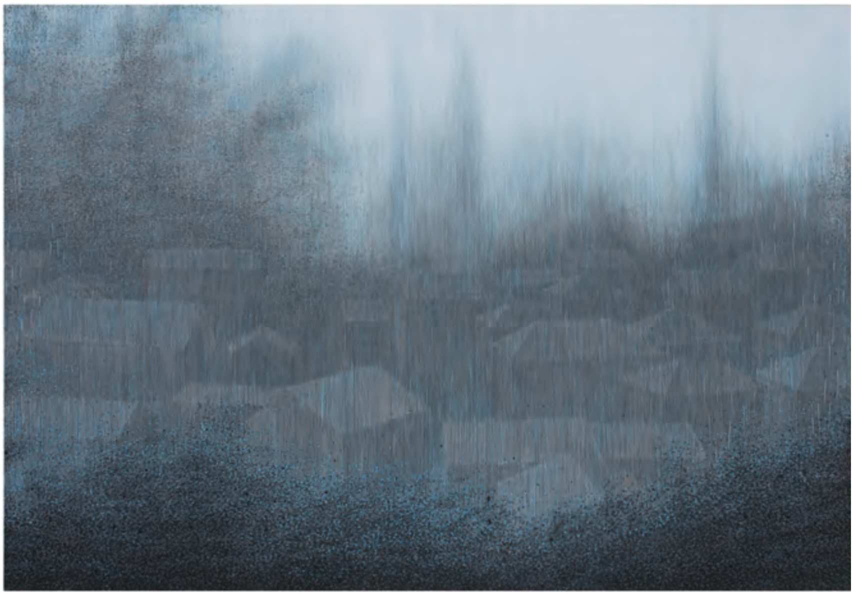
＜公募展＞

2005 年　第3回トリエンナーレ豊橋　星野眞吾賞展ー明日の日本画を求めてー（豊橋市美術博物館）

2008 年　第4回トリエンナーレ豊橋　星野眞吾賞展

2010 年　第8回雪舟の里総社墨彩画公募展（サンロード吉備路　他）

2011 年　第5回トリエンナーレ豊橋　星野眞吾賞展



題名：「包む」／サイズ：P100 号／制作年：2009/ 素材：美濃紙・胡粉・墨・群青・雲母

日本画研究室・アトリエのある本学美術棟。

そのための授業も取ったのです。ところが当時は大学院から学部の授業をとるさいに履修制限と言うのがあって、年間にとれる単位数が決まっており、どうしてもあと少しで取りきれませんでした。

―教育実習はやらなかったのですね。

越智　いいえ。付属小金井中でやりましたよ。

―教育実習の経験はどうでしたか。

越智　附属でしたから、一般の学校とは違うなと感じました。生徒の方が実習生よりもずっと慣れていますから。

―それでもそれは学芸大の学芸大たる所以ですね。他の美術大学などに進んでいたら体験できなかった。

越智　はい。そう思います。大学では教育に関する専門的な授業はもちろん、哲学や生物学など一見美術と関わりのないいろんな授業をとることができ、それぞれの専門家がいて幅広く学べたと思います。美術科でも一年生の時は彫金や油絵など一通りの基礎が学べましたからね。同級生も教員になった方をはじめ制作を続けている方、企業に就職した方など幅広い友人に恵まれました。学部の３年生くらいから日本画研究室に入り浸って絵ばかり描いていましたが、他の研究室

ともっと交流して人間関係を広げておけば良かったと今は反省しています。

——卒業してからも日本画を描き続け、いわゆる絵描きのプロになった訳ですが、小さい頃から目指していたことですか。

越智　家は普通のサラリーマン家庭でしたし、特別に絵を描き続けるという環境ではありませんでした。ただ、実家の近所に美術大の先生がいて、その先生のご家族が主宰している子供お絵かき教室があって、三歳のころから母に連れられてそこに通っていました。そこで私はいつか絵描きになるのだろうな、なんて漠然と考えるようになっていました。

——ということは、その頃から才能を発揮していた。

越智　いえいえ、私はその後も絵画コンクールに入選したり、賞をとったりするようなこともなかったです。同じ教室に通っていた弟の方が、賞を取ったり褒められたりしていましたが、その弟は絵はやめてしまいました。私は母が、何か一つのことを続けることで、見えてくるものがあると言ってくれたことや、自分にしか表現できないものがあると思えたから絵を続けたということです。

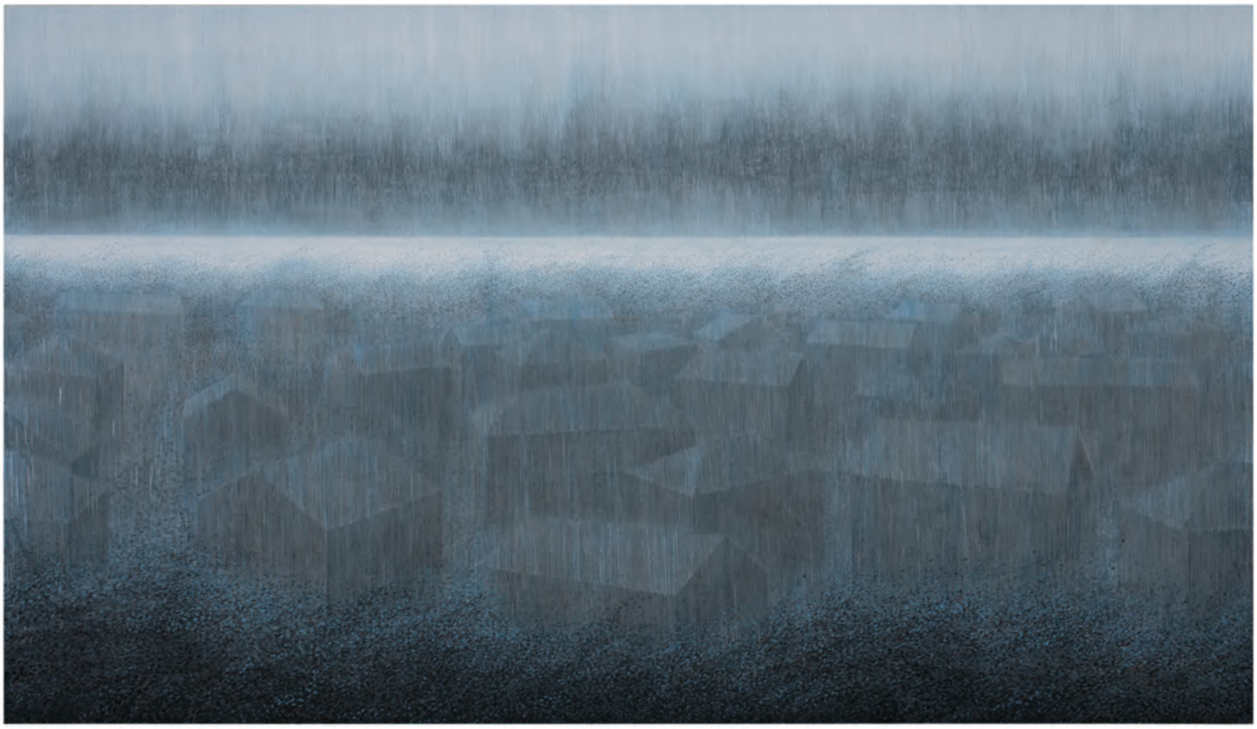
——目指したのは最初から日本画だったのですか。

越智　いいえ。高校の頃は油絵ばかり描いていました。同級生も油絵の人が大半で、この人たちと競ったら負けるなとは思っていましたけどね。それでもアンドリュー・ワイエス（＊註）が好きだったり、日本画はあまり意識の中にありませんでした。受験に際し、最初は周りと違う分野で勝負したいという単純な動機で日本画を選びましたが、それでも続けているうちにどんどん魅かれるようになりました。変な先入観を持たなかったのが良かったのかもしれません。

——でも日本画はいろいろ難しいところがありますよね。絵を描くことを職業とすると日本画は難しいでしょう。

越智　そうですね。絵を描き続ける難しさそのもの以外に、「日本画」の定義をどう解釈して作品にしていくかという難しさもあると思います。

——小金井祭の折に、美術科の展覧会を楽しみに見ているのですが、一見したのでは洋画か日本画か分からない作品が結構あ



題名：「水の記憶」／サイズ：P120 号／制作年：2011／素材：三椏紙・胡粉・墨・群青・木炭・雲母

＊註（1917～2009）アメリカンリアリズムの代表的画家と言われ、米大統領自由勲章、全米芸術賞を獲得するなどアメリカの国民的画家と言われる

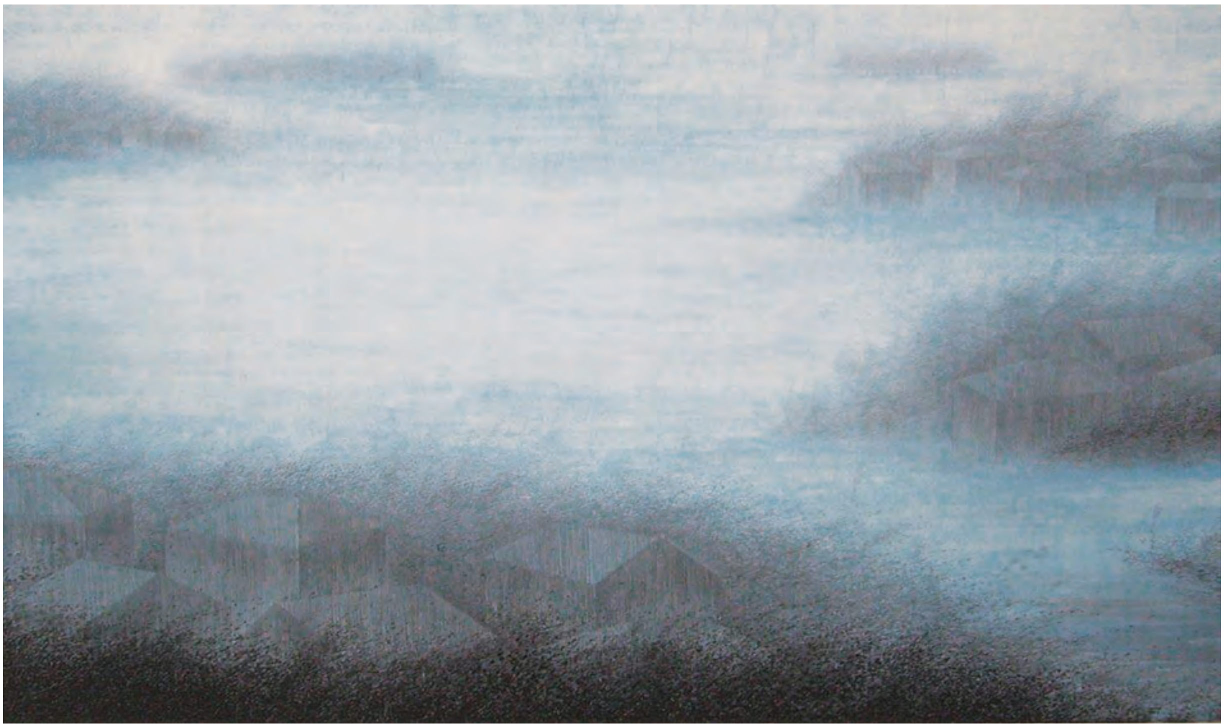
題名：「白雨」／サイズ：F120 号／制作年：2012/ 素材：三椏紙・胡粉・墨・群青・木炭・雲母

りますね。現在は洋画と日本画をどのように分けるのですか。

越智　伝統的な日本画の顔料で、和紙や絹に描くのが日本画で、油絵の具などその他の画材で描くのが洋画と言う分け方が少し前までは一般的だったようです。ところが今はその分け方に異論もあって、日本画の概念は揺らいできています。日本画について調べていくと、明治以降における美術の受容にはじまり、戦争の影響、日本というアイデンティティの確立、現代美術との関係など、色々な深い問題に突き当たります。それが日本画を続けるうえでの困難でもあり、面白さでもあると感じています。

――日本人の生活環境が変わったのも大きいのではないですか。家屋の構造が大きく変化して、日本画を飾る床の間が消えてしまいましたから。

越智　第二次大戦後、日本画滅亡論ということがあって、日本画はすたれかけました。床の間が消えたのと時期が重なりますね。近代以前の日本絵画は掛け軸をはじめ、襖や屏風に描かれることが多く、鑑賞の場所も戦前までは床の間が一般的でした。明治期以降、洋画に対応する形で「日本画」というジャンルができるわけですが、洋画とは鑑賞環境や絵画形態が明らかに異なり、それが「日本画」のアイデンティティを支えていた部分もあったのではないかと思っています。ところが戦後は額縁に入れるようになって、美術館や洋室での鑑賞が一般的となり、ますます洋画と区別がつきにくくなりましたね。でも私は日本画はなくならないと思っています。今は鑑賞環境とも関連して、文人画や水墨画を手掛かりに、かつての日本画家たちがどのような精神性を目指したのかということに興味を持って制作をしています。そのような少し離れた視点で「日本画」を考えられるようになったのも、学芸大で学べたお蔭かなと思っています。■



題名：「畔」／サイズ：P100 号／制作年：2012/ 素材：三椏紙・胡粉・墨・群青・木炭・雲母

取材協力：東京学芸大学 日本画研究室

会長室から

鷲山恭彦会長が自らインタビュアーになって、各界で活躍するOB，OG、さらに社会的人物に登場してもらう企画が、辞雍会ホームページで展開されている。題して「会長室から」。ここではそのうち「倉本聰さん」、「杉本淳子さん」「林四郎さん」の分を再録する。

倉本聰さんとの対話
『明日、悲別で』を観て

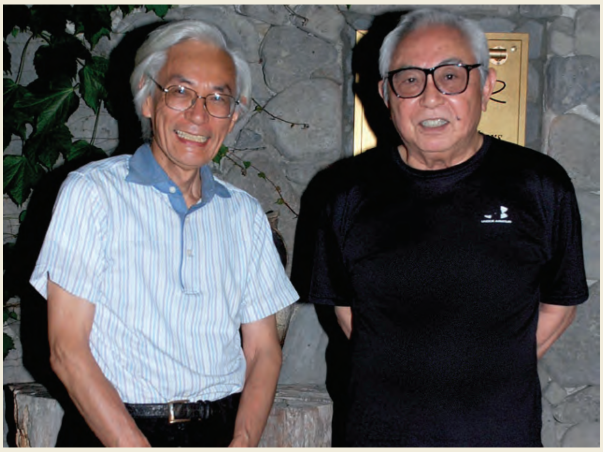
鷲山 富良野の大地から国民的テレビドラマ『北の国から』が生まれました。それ以来のファンですが、先生が豊島師範の附属小学校で学ばれたという縁もあり、本学の入学式で講演をしていただきました。自然塾も始められ、そこと連携協定を結び、今、野外教育の小森伸一先生が引き継いで下さっています。今回の東北大震災に対して先生がどういうメッセージを出されるのか注目していたのですか、最新作『明日、悲別で』の公演ということで、早速、拝見に伺いました。

倉本 以前、富良野から札幌に車で行く時に、芦別、赤平、歌志内といった炭鉱町を通ったのですが、国のエネルギー政策の転換で、間もなく閉鎖の運命にある町なのですね。そこの若者たちの群像を描いたのが、1985年の『昨日、悲別で』。1991年の『今日、悲別で』でした。そして今回は『明日、悲別で』です。

鷲山 国のエネルギー政策が変わって行く中で翻弄される地域の苦しみを描き、日本の近代的発展と豊かさを根幹で支えた人々の姿を真正面から扱った作品群です。『明日、悲別で』ですが、炭坑に埋めたカプセルに〈希望〉が入っていると言い伝えがあり、20年後に掘り出す約束で同級生たちは別れます。カプセル探しに閉山20年後に集まったのは、いろいろ事情があって2人だけで、関心を持った新聞記者と3人が坑道にはいります。そこで人柱になった朝鮮人労働者や売春婦の幽霊に出会います。そして突然の落盤事故。生き延びた3人は、露出した岩からカプセルを見つけます。中には《希望》のシンボルとして、ツルハシ、ハンマーが入っていました。外では救助隊が組織されます。最後は救出の場面となるのですが、人と人との結びつきというか、絆というか、連帯の意味を鮮明にされようとしたのでしょうか。

【人間のエネルギー】

倉本 結びつきというより、念頭にあったのはエネルギーの問題です。希望とは何か。石油でも、石炭でも、原子力でもなく、人間の体が本来持っているエネルギー、この決定的な意味を考えたかったですね。今の社会は、この人間のエネルギーを使わないで、サボることを便利と言っているわけでしょう。2メートル歩いてテレビをつければいいのに、動くことを嫌ってリモコンでやる。結局この便利さ、そこから生まれる需要が、原子力発電の必要にまで行き着くわけです。このことが問われなければなりません。人間のもっている本来のエネルギーを解き放つことと関わってくることです。



鷲山 4倍のスローモーションがありますが、あれは凄いですね。生の人間のエネルギーの発揚を象徴しています。ただ、見終わった感想は炭坑や原発で働く人たち、原発や放射性廃棄物といった大きな問題が提出されていて、終わり方との間で落差があるように感じました。「コロンブスを上陸させずに殺せばよかった」という言葉も、そこまで遡って近代を問う文明史的な見方を触発させられましたが、そこと結ぶ線は何かと。

【論ずる人間と根源の人間】

倉本 あれは新聞記者の言ったことです。新聞記者は同時に「神様はいるのか」とも疑問を呈しています。新聞記者と語り手の老婆とは、対極的な人物なのですね。新聞記者というのはインテリですよ。今の世の中のインテリ層であり、知識人です。「文明が滅び、人類が絶望に瀕した時に、カプセルを開けよ、希望を封じ込めたり」とあるのですが、ツルハシが出てきても、彼にはその意味がわかりません。それとは無関係に生きているのが現場の人間です。老婆はその象徴ですし、例えば江口という議員は、放射性廃棄物をどこも受け入れないことに義憤を感じて、われわれの炭坑の地下に受け入れようじゃないか、という提案をします。また、福島原発に働きに行った加山たちはブラブラ病にかかっても、原発がああなってしまったからには誰かが中に入ってやらなくてはならないと、危険な仕事をやっているわけです。世間には、現実にこういう人間は一杯いますよね。そういう「根源的な部分を支える人間」と新聞記者のように「論じているだけの人間」とは違います。ここははっきり言いたいところですね。

鷲山 劇全体であぶりだされるのは、近代という歴史がもった差別と抑圧の構造であり、炭坑労働者、朝鮮人労働者、原発労働者の発するメッセージは何かということで社会的存在としての彼らは、何をどこまで問いかけているのだろうかと考えました。

倉本 そのように期待して観て下さるのはいいですが、しかしそれは左の脳で、分析しよう、分析しようと考えて見てしまう見方ですね。劇というものはもっと直截的な

ものだと思っています。もっと右脳でストーンと受け止めていい。例えば、歌手の北島三郎がなぜあのように多くの人々の琴線に触れて、受け入れられ、愛されているのか。僕は昔、そのことを知りたくて、付き人を志願して、北島三郎の公演について回ったことがあります。流しをやっていた人ですから、観客とのやりとりが素晴らしい。学識のレベルとか、階層的なレベルとかが一切ない所で、人と人との裸の付き合いなのですね。ものを書く姿勢ということで僕の転機になりました。演劇も同じように、極めて人間くさい、土着的なものなのですね。余りに分析的にものを見ると演劇をつまらなくしてしまいます。

鷲山　「同化でなく、異化の眼差しで」「劇的演劇ではなく、叙事的演劇を」などと言ったドイツの劇作家ブレヒトは、演劇を左の脳で見る典型の人で、その影響を受けているのかもしれません。『明日、悲別で』は、考えさせられる題材がたくさん詰まっています。ブレヒトは『ガリレオの生涯』の後に、来るべき原子力の時代を見据えて、アインシュタイン劇をつくろうとして果せませんでしたが、そういう問題意識と繋がる素材がこの舞台には沢山あって、新聞記者と老婆の対比という以上に、いろいろなレベルの問題提起を思いました。

倉本　ブレヒトも読みましたが、そこは受け止め方です。僕には演劇は理屈で受け止めてもらいたくないということが強くあります。東北大震災の現地に僕は何度も足を運びましたが、向こうの人は矛盾だらけで、結論は出ていないし、問題だらけで、怒りが渦巻いているし、混乱して何が何だかわからない。彼らに対して何をどう提示したら、響くのか。彼らの琴線に触れるにはどうすればよいか。そこがポイントです。アインシュタインの生涯的な書き方ですと、わかる人はごく一部だと思う。やはり歌謡曲が大好きだったり、北島三郎を聞いている人たちの琴線に触れるとはどういうことか、この目線が凄く大切だと思いますね。

鷲山　今日の舞台は、まさにそこに働きかける決定的な力を持っていると思いますし、人間の持っている力を信じなさい、というメッセージもスパッと入って行くと思います。そういうパトスの面と、でも、あれだけの重い課題の提示があるのだから、ロゴスの面も欲しいと思ってしまう。

倉本　そのように思う人もいるということです。作家は反論できませんし、反論すること自体おかしいことなわけですね。例えば『北の国から』ですが、あれは教科書になっていましてね。試験問題というのがあって、その正解があるんですよ。読んでみて「へえっ、何だこれは」と思ってしまうんですね。僕が考えもしていない答えなのです。学者って不思議な分析をするものだなあと思います。『徒然草』の解釈、いろいろありますよね。あれ、吉田兼好は一体どう思っているのかなあ、と思ってしまうことがあります。

鷲山　先生の言われた知識人の問題ですが、今、私は郷里で学校ボランティアとか、酒作り仲間との地域活動とか、木造駅舎保存のカンパ集めとか、近くにある浜岡原発をどうするかの議論とか、それぞれ少しずつ関わっているのですが、そこで接する学校の先生、保護者たち、市役所の人、退職した会社員、農協や郵便局の人、農家も人もいますが、みんなそれぞれ大学を出ていたりして「知識人」です。根源の人と知識人の対立というより、根源の人も今や知識人です。そしてそこに先生のいわれるように、知の在り方が問われていると感じます。モンスターペアレンツも、みんな高学歴です。その中で活動していると、皆さんのパトスにも響かないといけないし、ロゴスにも響かないといけない。ロゴスに働きかける必要度合いは結構大きい。しかしなかなかうまくは行かない。アップ・アップしながらやっています。倉本先生が示されたような、隠れていた原理をしっかり示すことも求められていますし、ここだという押さえ所が欲しい。同時に、その原理と課題とを結び付ける、考え方というか、新しい認識というか、生きた言葉が欲しい。無意識にそういう必要とオーバーラップさせて観てしまうものですから、この劇を観ても、着地は素晴らしい、ツルハシに象徴される労働の意味をこれほど正面に据えた劇は稀有ですから、まさに我が意を得たりなのですが、でも、課題とつないでいく倉本メッセージがもっと欲しいと思ってしまったのだと思います。

【矛盾を矛盾として】

倉本　廃棄物をどうするか。それに解答は与えてはいません。「皆さんのお考えは？」ということですね。最後のところ、原子力をどうするか、実際、僕には判らないことが多い。僕にはできない。判らないものはわからない。解決を与えるものを出したら、橋田壽賀子になってしまいます。ブレヒトも、矛盾を矛盾として出していると思います。放射能とどう向き合うのか、原子力とはそもそも何なのかと。世の中の大きな動きがあります。時系列で調べてみると、第八次石炭政策で炭坑が潰される時に原子力の立地が始まっている。両方の浮沈が明確に出て見事に重なっている。これまでは地球の中の太陽光の遺産である化石燃料を使っていたが、これからは太陽そのものの核融合を真似できないか、と思って始まったのが、原子力ですね。廃棄物の処理方法のないまま、見切り発車してしまった。地下に埋めるという発想がまず最初に出たのですね。オンカロがそうですし、幌延がそうです。埋めることは禁止するという承諾のもとで、地下の貯蔵が可能かどうかの実験

を幌延ではしている。使われなくなった炭坑の地下を利用できるのではと、この舞台で設定したのは、そう考えた者がいるに違いないと思ってそうしました。炭坑閉鎖の時には、昔は水で埋めていた。土では埋め切れないからです。その後の炭坑閉山では水も入れてない。あの坑道をそのままにしたのはなぜか。これを活用しようと発想をした人がいただろうと思いました。原子力の廃棄物の問題は、ここまで来てしまった。

鷲山　廃棄物処理は社会的に難しいし、儲からないから放置した面もあると思います。ここには差別と抑圧、搾取と放置が集中的に現れ、大きな社会問題が提起されています。それに対置されるのが、人間のエネルギーの復権ということですね。

倉本　そこしかない、と考えますね。アーサー・ヘイリーという作家の書いたものが頭の中にありました。『エネルギー』という小説ですが、これは、アメリカの西海岸の電力会社が水涸れになって、節電のために電力をカットしていくわけですが、その場合に電力をカットしてはいけない所が何箇所かあって、病院、警察、消防などですが、主人公はそこに説得に回る。身体障害者の家もそうですね。そこに行くと、交通事故で下半身不随になった女性がいる。その女性と交渉するのですが、彼女と話している内に、その女性に恋をしてしまう。そしてセックスまで行くのですね。そうすると下半身が不随していたその女性はセックス出来てしまうわけです。そのときに人間のエネルギーとは何と凄いものかと女性が感ずる。これが『エネルギー』という小説ですが、水力発電の話から、最後にそこに行ってしまう。それが大きなヒントになっているんです。

鷲山　それは人間が本来持っているエネルギーの発現であると同時に、人間と人間との関係の中から生まれた新しいエネルギーでもあるわけですね。

【海岸林に残った4本の木】

倉本　先程、「きずな」と言われましたが、きずなという言葉がどこから出て来たのか。僕は今回の震災でひとつ見たのですが、海岸林が全部流されている。その中で4本の木が生き残っていた。根っこまで水に洗われているのですが、4本ちゃんと立っている。根っこがお互いの根っこと綱のように絡まってあるのです。だから生き残っている。これを見て、それが「きずな」の語源ではないか。木と言うのは根から始まっていますよね。木の根種からはまず根っこがでますよね。木の根が綱のように絡まっている、そこから木の綱、きずなと言う言葉が生まれた気がするのです。仏教用語で言うと絆は、糸偏に半でしょう。紐で牛を結ぶと書いてある。僕は違う気がする。綱のようにお互いを絡み合わせて、保たれているのですね。そこからいうと「ゆい」という言葉がありますね。結いも結んでいくという、綱を結んでいくという、そこから来ているような気がします。それから「もやい」も、つなぎとめるという意味です。木の根っこの絡み合いは、綱にしか見えなかったですよ。すごい勢いで絡み合っている。人間以前に植物があるわけですから、植物の根の張り方、お互いに助け合っている助け合い方といったものが、絆という言葉の語源であるような気がしましたね。

鷲山　「夜、みんなで笑ってご飯を食べるために働いた」という言葉が劇中にありますが、あの頃、子供たちは、家の仕事を手伝い、労働しました。今はすべて電気釜がやります。先生のおっしゃるように、文明が進んだということは、自分のエネルギーを使わなくなったということですね。全部何かがやってくれる。生き方が希薄になる。コミュニケーションもうすくなる。そのうちにコミュニケーションをどのように取ったらよいのかさえ、判らなくなる。家庭もそう、地域もそうです。先生の言われるエネルギー問題は、コミュニケーションの問題でもあり、生き方の問題でもあり、根本のところで、人間がどう絡まって生きていくかという問題ですね。

倉本　あの根っこは、根っこ同士だけではなくて、石とも絡みつき、石に食い込んでいるんですね。そして支え合って立っているのですね。僕は今、「森の長城プロジェクト」というのを、細川護熙さん、宮脇昭さんたちと始めたのですが、瓦礫を引き取るところがないなら、土と一緒にうめちゃえ、そこに土塁を築く、そして、海岸だからそこに松という考えはやめよう、松は根が浅くてダメなのですね。地元にある直根性のもので深く根のはる木にして、瓦礫の間に空洞がありますね。そこには酸素があるわけだし、鉄のさびも栄養になるかもしれない。そうしたものを活用してしっかりした森を作って、それを岩手から福島まで300キロに渡って高さ30メートルの防潮堤を作るというプランを今始めています。そういう物の考え方が大切なのです。拒否する人は、拒否するだけ、しちゃいけないと主張する人が目立ちます。石巻の瓦礫も北九州にもっていくと放射能が移るという過度な反応をして、妨害する。批判する人間と、積極的にじゃどうするのだという人間と、二種類の人間がいます。

鷲山　現代人は、すべからく知的操作でもって生きざるをえなくなっている。それは大学の教員だからというのではなくてみんなそうです。その場合大抵が批判的知性なのですね。解釈し批評し評価し位置づける。そこから事柄は始まるのにそれだけになり、そこで終ってしまっている。一次産業や現場の人たちのように、実践的知性ではない。

【原人類を生きる】

倉本　僕はそういう知識人がいやだから、富良野に住んだわけです。そういう知識人

だけでは人類はどうにもならないし、この地球もどうにもならないと思います。ですから現代人がそうであるならば、この知識というものを活用して、こういう言い方が適切かどうか判らないが原人類として存在することができるようになれば、今の人類を少し変えられるのではないかと思います。

鷲山　「原人類」を私たちの生き方の基本におくという思想は重要ですね。その場合、何を是とし、何を非とするか、何を用とし、何を不用とするか、何を美とし、何を醜とするかという、価値観が厳しく問われると思います。人間の経験を集約し、人知の限りを尽くして生き延びた人間として、『明日、悲別で』の老婆がいます。そしてその老婆は、先祖たちとも響き合っています。人間の経験知の徹底したアンサンブルです。これは凄いと今日観て考えさせられました。

［語り部の老婆］

倉本　木を描こうとするとき、根っこは描きませんよね。僕の中には描いてない根っこがあるんです。人に言ってないベースが。あの語り部は、実は在日なのです。苦界をなめている。その中でやっとの思いで炭坑夫と知り合って、六軒長屋に住んで、日本名に改名して日本人になって。在日って日本に対する愛国心がすごく強いんですね。「笑って飯を食べるために」という話がありましたが、悲惨な生活から這い上がって、子供もいるけれども、父ちゃんが死んだ後は、生活保護を受けつつ、でもその大半を猫を可愛いがるのに注いでいるという、そういう老婆です。

鷲山　なるほど。だから老婆は全てと深くつながれるのですね。日本の先祖たちとも響き合うし、もちろん亡霊たちの踊りとも、売春婦たちの踊りとも、深く響き合っている。老婆が語れないものを、亡霊たちの踊りが表現している。深くシンクロして、それが深い歴史につながっていると思います。

倉本　在日という言葉は新しいですが、古来、大陸からたくさんの人がやって来ました。彼らはさまざまな苦しい体験、悲惨な生活をしつつ、しかしそのなかでしっかりとかつての日本を作って来たし、今の日本を支えてきたわけです。

鷲山　そういう人たちの生活と人生には、差別、抑圧、搾取、偏見、民族、自立、共同、創造といった、ものを考える際に、決して手放してはいけない鍵が、いっぱい詰まっていますね。

倉本　終わり方に、えっと思われたというのは、判ることは判るんですよ。意識的な肩透かしを食らわしているということがありますから。僕はドラマの中で割と肩透かしをやります。理屈で通していったら、ここに結論がくる、ということなのですが、しかし、そう持っていかない。その結論に行かないし、行けないのです。で、肩透かしをする。まったく別に、最初から僕が考えていることがあって、実はそれはあちこちに潜ませて、ばら蒔いているのだけれども、最初のところをもうお客は忘れているようなところで、潜ませていたものを圧倒的に見せてしまう。そうしてお客に否応ない感動を生ませてしまおう、ということは考えます。

鷲山　成程。

倉本　僕は劇に解決を求めるのは良くない傾向だと思いますね。理屈でこられると困るんですね。今日の舞台も、なぜ最後に手錠を外したか。加山にかかった手錠は、先祖の神がはずすのです。ありえないことでしょう。法律のルールからは変ですから。なぜそんなことが可能かと。

鷲山　しかし、これは凄いことを暗示しています。違う規範を支配させるということでしょう。これは革命ではないですか。祖先の霊がはずしたということは、民衆倫理がはずしたということでしょう。祖先の霊は、今の日本社会に革命が必要だと言っている。

『北の国から』　風力発電でついた電燈

倉本　炭鉱事故もそうだし、今回の大災害もそうだけれども、こういう問題を、炭鉱や東日本のみの問題ではなく、われわれ全体の問題として捉えないといけません。今度の災害を諸外国の方がはるかに真っ向からとらえていますね。原発反対のうねりとなって、新しい形を探っている。日本では、復旧復興、消費の拡大などといって、またぞろ、目先の必要に目を奪われていて、これまで通りのやり方と生き方を通そうとしている。人類の生活の根本部分をどのように立て直していくか、それが最も求められているのに、哲学が感じられないですね。

［夜になったら眠るんです］

鷲山　現実をどう見るか。主観の数だけ現実があります。先生の舞台をどう観るか。観客の数だけ解釈があります。だいたいの批評というのは、作品としっかり出会わずに、その人自身としか出会っていない「独りよがり批評」だったり、書かれていないことを要請する「無いものねだり批評」だったりで、私の発言が典型ですが、先生とお話しして、哲学というか、現実の捉え方、自分の知の在り方の問題を強く自覚させられます。

倉本　生き方の問題としてもそうですね。『北の国から』のドラマの最初の所で、「電気がなかったら、暮らせませんよ」というセリフを書きました。

鷲山　そうでした。電気のない麓郷の生活で、東京から来た純が「電気がない!?。電気がなかったら暮らせませんよ」と叫ぶ。

それに対して、黒板五郎が「そんなことはないですよ」と断言する。「夜になったらどうするの！」と問う純に対して、「夜になったら眠るんです」と応えますね。日常の会話なのに、今、思えば思うほど、奥の深い会話です。文明史的にも、哲学的にも。未来への覚悟と希望を暗示して、驚きます。

倉本 便利と効率の追求で、人間がおかしくなってきていますね。しかも、福島の原発がつくる電気が関東を潤すというのも、考えてみれば変なことで、問題のあるものを平気で地方へ押し付けています。東京が責任をもつべきものでしょう。原発が止まって停電が起こることで身に過ぎた豊かな生活をしっかり省みないといけないのに、最近は喉もと過ぎれば熱さを忘れる状況が生まれつつある。労働という話が出ましたが、土を知らない、自然を知らない、古来の日本人の生き方を知らない。最近は農協の職員も農業をやったことがないし、くわや鎌を扱ったことがないのでしょう。少年少女時代の体験は大切なのに、知識尊重、体験軽視の教育システムのなかで、日本からトムソーヤがいなくなりました。結果がすべて、という現代の教育のなかで、過程の中で、知恵を鍛える教育は是非とも必要です。

鷲山 今日は、貴重な時間を割いてくださり、考える課題をたくさんいただきました。これから7月中旬は、福島、岩手、宮城の14か所の被災地で、無料公演をされます。その成功を楽しみにしております。

（2012年7月4日　富良野にて）■

杉本淳子さんとの対話

書道への想い・日高秩父のことなど

[書道を35年教えて]

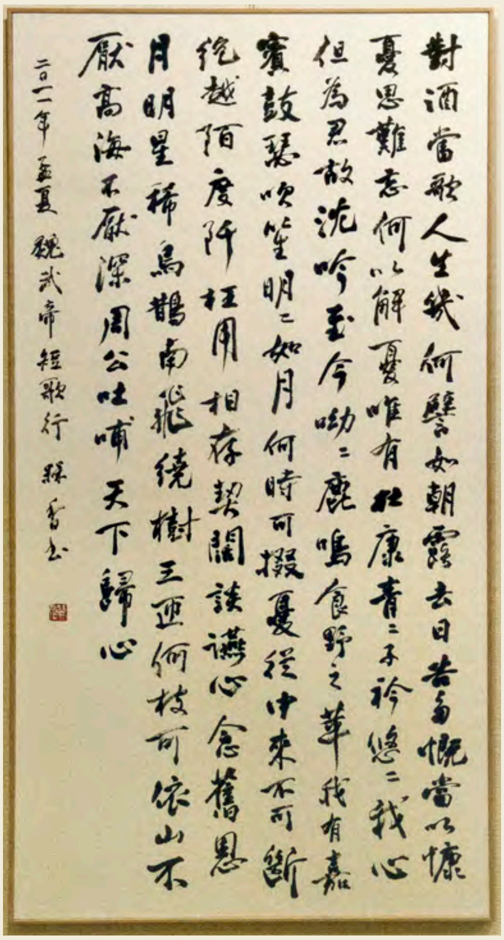
鷲山 銀座の鳩居堂で開かれた「槑香 杉本淳子書展」に伺いました。普通の字から甲骨文字まで、いろいろな書体が興味深く、また、知っている漢詩にも出会えて、大変豊かな時を過ごさせていただきました。魏の武帝の詩「對酒當歌人生幾何譬如朝露…」があり、これは『三国志』の英雄である曹操の［酒に対してまさに歌うべし、人生幾ばくぞ、たとえば朝露の如し…］だと気付いて、たどたどしく読み下してみたのですが、先生の書かれた字を味わいつつ、久しぶりに気宇壮大な気持ちになりました。

先生が学芸大に入学されたのは何年でしょう。

杉本 昭和28（1953）年です。1年生の時には大泉校舎、2年が小金井校舎で、3年、4年が世田谷校舎でした。1年上に、後に学芸大の教授になられた小木太法さんがいらっしゃいました。先生方は、田辺古邨、伊東参州、鈴木竹影、続木湖山、氷田光風という皆さんで、助手は吉田鷹村先生でした。卒業してからずっと高校で書道を教えていました。子育てで中断した時期もありましたが、70歳になる少し前にやめてから、やっと書展をやってみようか、という気持ちになって始めました。

鷲山 書は大学では、草書とか隷書とか、系統的に学ぶのですか。

杉本 楷書、行書、草書、仮名など、基本を学びました。四年生の授業で、非常勤で来られていた山田正平先生に篆刻の手ほどきを受けました。卒業してから山田先生のお宅に伺い、更に篆刻を習いました。日展に出品したこともあります。しかし山田先生が早くに亡くなられ、その後はどなたかに指導を受けることのないまま、来てしまいました。



鷲山 卒業されてすぐ教職につかれたのですね。

杉本 拘束されたくないという気持ちが強く、専任で務めるのは遠慮しました。精華学園、成城学園、恵泉女学園などでずっと非常勤講師として勤めました。伊東参州先生には「湯島の聖堂に通いなさい」と言われました。東大を定年になられた加藤常賢先生や赤塚忠先生が、金文と甲骨文の講義をしておられました。それで、これらの文字に目が開かれました。

鷲山 先生を存じ上げるようになったのは、図書館長をやっていた時に、日高秩父関係の資料が家にあるので、大学に寄贈できないかという話があったのがきっかけでした。明治から大正にかけて国定教科書の書道の字は、日高秩父だったということは私のような字を書くのが苦手な者も知っていましたので、これは本学にぴったりの貴重な資料と思いました。書道の石井健先生に整理をお願いしました。整理が出来たので正式に寄贈したいということで、挨拶にい

らっしゃいました。その時に、日高秩父がお祖父さんに当たられ、杉本さんご自身も学芸大の書道を出られたことを初めて知りました。日高秩父はどういう方だったのでしょう。

【明治・大正の書家・日高秩父】

杉本 出身は宮崎のようですが、生まれたのは栃木です。東京府に勤めたようですが、書を長三洲という書家に学び、その関係で宮内庁に勤めるようになり、内大臣秘書官という職名をもらっています。明治天皇とは同い年で、どこかで気が合うところがあったのでしょうか、行幸の時には「日高、一緒について来い」といわれて、よく全国をまわったといいます。昭和天皇は、その頃は皇孫殿下と呼ばれていました。明治天皇から皇孫殿下に書を教えることを命じられたようです。皇孫殿下のために教科書を作りまして、その版木が残っていました。刷ったものは学芸大にありますが、版木そのものは、岡山県津山の『洋学資料館』にあります。日高秩父は、津山藩の洋学者・箕作阮甫の孫娘と結婚しました。その縁で、版木を津山に納めたのです。

鷲山 津山は、中国山脈の真ん中にありますが、大変魅力的な町ですね。津山城は、石垣が昔のまま全部きれいに残っていますし、城の跡に植えられた桜も素晴らしい。お城を作ったのは森忠政だと知りました。本能寺の変の時に、小姓の森蘭丸・力丸・坊丸の三兄弟は織田信長と運命を共にしたのですが、一番下の弟は、小さかったので生き残りました。その人が後に城主となって基盤を作ったのですね。そんな歴史のある大変面白い町ですね。

杉本 祖父が書道の国定教科書をどういう形で執筆するようになったか、その経緯は知りません。文部省から求められたのだと思います。そして、大正9年に69歳で亡くなっています。

鷲山 実は私の祖父と日高秩父と一回だけ接点がありました。祖父は静岡県磐田市に二宮尊徳の報徳思想の実践家で伊藤七郎平という人がいたのですが、その人の顕彰碑を建てることになり、その字を日高秩父に頼んだというのです。母の話しなのですが、見附の報徳館に「日高でございます」と入って来た人が、あの高名な日高秩父なのかと大変驚いた、といいます。大正5年だといいますから、亡くなる4年前ですね。

杉本 直前まで元気だったといいますから、見附まで伺ったのですね。

【疎開と紙漉きの縁】

鷲山 書は、お祖父様からの影響はあるのですか。

杉本 私は昭和8年生まれですから、祖父のことは何も知りません。私が大学に入る時に書道科を選んだのも急に思い立ったようなもので、それまで書道をやっていたわけではありません。しかし、家がそういう雰囲気で父も書家でしたし、私も自然に身につく何かがあったのでしょうか。

鷲山 成育歴のなかで、そういう雰囲気ということの意味は大きいと思います。小中学生の頃は戦争中ですね。

杉本 東京は空襲で危ないということで母の縁者が福井県にいましたので、小学校6年生の時に、疎開しました。紙漉きで知られた越前大滝村です。疎開先の岩野平三郎は、横山大観や下村観山の注文に応じて和紙を漉いていました。こうした画家たちとの連絡のために、東京に出て来て母の実家に泊まりました。実は私が今使っている和紙は、そこにたくさん残されていたものです。今は三代目の岩野平三郎が継いでいます。別家の岩野市兵衛は、母の従兄で、今はその二代目が紙漉きの人間国宝で、版画の和紙を漉いています。紙漉きが専業で農業はやらないものですから、村には食べるものがありません。更に知り合いを頼って、今度は山形へ行ったのですがここもだめでした。敗戦の年に東京に戻ろうとしましたが、職がないと都内に転入できない時代で、大宮で足止めになり、そこで暮らすことになりました。小学校は転校ばかりして、ろくに行かなかったために6年生を2回やりました。中学校は大宮で、昭和22年に発足した新制中学1年に入り、その年の9月に東京に転入し、恵泉女学園に行きました。

【教育…王羲之や顔真卿などから直接に学ぶ】

鷲山 学芸大を卒業後は、ずっと書道の先生をされたわけですが、どういう考え方で指導されたのでしょう。

杉本 生徒中心ですね。生徒たちがどうしたら上手に書けるようになるかなあ、といつも考えていました。自分の書を確立しようなどという気持ちはなかったですね。

鷲山 書展を開かれて、まさに先生の書の境地を示されたわけですが、これまでに先生の作られた教科書はあるのですか。

杉本 学芸大では、王羲之なら王羲之、顔真卿なら顔真卿、唐以前の書を中心にそこから直に学びなさい、と教えられました。「現代人の書いたものは見るのは楽だ」と伊東参州先生はよくいわれました。「僕が書いたものを手本にするのは楽だよ。でもどんな小さな字でも、王羲之から直に学ばないといけない」と。私はそれを守りまして、文部省の教科書の中でも特に王羲之とか顔真卿とか、そういうものを使いましたね。難しかったら最初は私が書いてあげる。でも後は直にここから学びなさいという風に。

そしてワープロで略歴、エピソードなども打っては配りました。

鷲山 書道の歴史も教えることは大切ですね。私は字が下手で全くだめですが、中学校1年の時の先生が日本と中国の書家について調べさせたのです。その時覚えた知識が書道の知識のすべてですが、「蘭亭序」はその時に覚えました。知っているということは大切です。「蘭亭序」が日本に来た時には、思い出して早速見に

いきました。唐の太宗でしたか、王羲之の字が好きで、死んだ時、全部墓に持って行ったので、真筆は残っていないのでしょう。ひどい皇帝ですね。

杉本 でも太宗のおかげで「蘭亭序」は残っているのですよ。太宗は、王羲之の字が好きで好きでしょうがないから、中国全土からすべてを買い集めさせたといいます。本物でも偽物でも、お金に糸目をつけないで全部集めさせたのですが、「蘭亭序」だけは、どうしても見つからなかった。王羲之7代目の孫に智永という坊さんがいて、その人が持っていたんですね。秘密にしていたのですが、持っているらしいと判って、太宗は書に見識のある者を智永のもとに通わせます。そして仲良しになって、智永の居ない間に盗んで来させた。こうして取って来たから「蘭亭序」は、現在に残っているのです。真筆は墓にもっていったのですが、褚遂良とか、欧陽詢といった人たちに臨書させました。太宗はそれを褒賞として下賜したんですね。沢山あったのが、戦乱の多い国ですからほとんど無くなりました。その中で残ったものが今もあるのです。王羲之の手紙もありますが、石に彫られ、更に拓本にして残ったものもあります。

鷲山 石に書家の筆の通りに彫るなど、考えてみると凄い技術ですね。書道教育については今お話しを伺って判りました。書の研究というか創作の方ではどうだったのでしょう。卒業直後から山田正平先生に篆刻を学び、湯島の聖堂に通って加藤常賢先生、赤塚忠先生に金文と甲骨文について講義を受けられたとおっしゃいましたが、若い頃のこうした影響は大きいですよね。

【金文と甲骨文字】

杉本 関心を持ちましたが、自分で書いてみようとは思いませんでした。しかし学んでいくうちに自分でも金文を書きたいな、甲骨文を書きたいなと思うようになりまして、書き始めました。しかし、書き方についての先生は、いませんでしたから、自分でやったのです。ただ、元をしっかり教えていただいていました。きちっと字引を引かないといけないとか、間違った字は書いてはいけないなど。同じ金文でも、こういう字がある、ああいう字がある、という状態です。字引を引き、引き、書いてきました。金文や甲骨文字は、昔はありませんでした。篆書といって、秦の始皇帝時代のきちんとした篆書や金文はありました。甲骨文字が発見されたのは、1900年頃のことで、殷墟で発掘されたのです。黄河の安陽の近くで、伝説となっていた殷の遺跡の発掘ですね。動物の骨を粉にして薬として売っていたのを劉鉄雲という学者が骨の表面の記号を見て疑問を持ちました。この骨はどこから手に入れたのかと薬屋に聞いたのですが、薬屋は教えませんよね。そういう前史があって、その後、殷墟の発掘が始まり、甲骨文が一杯出てきたわけです。羅振玉などの学者が研究して、現在の漢字の一番古い書体であることが判ってきたのです。祖父の時代には、こうした文字は知られてはいませんでした。行書を書けば、祖父にはかなわない。だから私には、祖父とは違ったものをやってみようという下心がどこかにあったのかもしれません。

鷲山 お祖父様には及ばないと思ったわけですね。及ばないポイントってどこなのでしょう。

杉本 一言でいうと、ピシッとしているのですね。例えばですが、私は真っ直ぐ書くことが苦手です。線でも引いておけば別ですが、ヨロヨロしている。私は曲がってもいいんだ、それが現代のやり方だと思ってやっているのです。しかし祖父はそれは絶対に許さなかったでしょうね。ピシッと真っ直ぐなのです。ですから祖父の子供に対する教育は、滅茶苦茶にきびしかったようです。子供は10人いましたけれど、とにかく父親は怖い人ということだったようです。宮内省につとめていましたし、昔の人ですからね。きちんとしないと気がすまないし。厳格な人だったのですね。

鷲山 凛然としたところが及ばないということですか。

杉本 技巧的にも及ばないですね。筆遣いは真似できません。何も知らない方は、お祖父様の字にそっくりですねといわれますが、私から見ると全然ちがいます。若いころは特に日高秩父の孫などと思われたくないし、父の字にも似たくないと思いました。現代的になりたいと強く思っていました。でも結局、仏さまの手の上に乗っていたのかなという気もしないではありません。血の中にあるのか、生活の中にあるから染み込んだのか。祖父の書は、我が家に常に懸けてあります。目から自然に身についたのかもしれません。臨書というのは、横に手本を置いて書くことですが、その時にしか見ませんね。掛軸や額を居間に懸けてあるので、無意識のうちに沁み込むのでしょう。祖父の字を臨書したことはありません。しかしどこか似ていると言われて、今は半分あきらめています。しかし私は、祖父の後を追おうとは思いません。

鷲山 大変興味深いお話しをありがとうございました。先生の境地がこれからどのように展開されていくのか、楽しみにしております。

（2012年6月27日、杉本淳子宅にて）■

林四郎さんとの対話

小学校における理科教育を考える

鷲山　先生とお会いしたのは、有馬朗人先生が主宰されている『理科教育ルネサンス』の研究会でした。「教員養成大学における理科教育――課題と展望――」の報告を私がした時、コメントして下さいました。今日は、校長をされている北区立滝野川小学校に伺いました。

林　ようこそいらっしゃいました。私は東京学芸大学A類理科の地学の出身です。大学に入学したのが1967（昭和42）年で、入学したその年の6月に正門がロックアウトされ、大学紛争が始まりました。典型的な「68年世代」です。当初、単位履修の状況が悪く、4年間で林が卒業出来たのは奇跡といわれました。地学の研究室では、鹿沼茂三郎教授の指導を受けました。当時の先生方は稲森潤助教授、岡村三郎講師、石井醇助手といった方がたでした。

　卒業して東京都の小学校に務めました。大田区の矢口東小学校が初任校です。その後、附属世田谷小学校にも18年間勤めました。校長職になってから全国小学校理科研究協議会の会長を務めたりしましたので、有馬先生の研究会に参加させていただいています。

鷲山　有馬先生の研究会では、実に多彩な方々が理科教育について熱心に考え、研究されておられますね。

林　社会的影響力があり、実際に社会を動かしている方々が、現場の教員の話を聞いて下さるのは大変有難いことです。

［母親の虫嫌い　観察・実験の欠落］

鷲山　先生は、1971年に本学を卒業されて、理科教育を常に念頭に置かれながら教えてこられたわけですが、当時と今と対比して感じておられることは何でしょう。

林　子どもがある現象をみていろいろ興味を持ったり、疑問をもったりする態度は、ほとんど変わっていないと思いますね。感動も驚きも昔と変わらない。むしろ今の子供は、自然界にあるものを探してきて見せると、経験がないだけに余計にびっくりしますね。余計に興味を持ちます。小さい子どもは、虫嫌いではありません。嫌いというのは文化ですから。お母さんがギャーなどと言うものですから、子供に刷り込まれてしまう。小さい子は、たちまち興味をもって、触ってしまったりして、全然問題ないのですが、上の学年になると駄目になってきます。

鷲山　お母さん方の虫嫌い文化は問題ですね。

林　子どもたちは昔と変わっていないのです。一番の問題は、教える教師ですね。小学校の場合はほとんど文系です。どういう歩みをして教師になったかというと理科はほとんどやっていません。最近、学芸大もそうですが、偏差値が上がって、進学校から教員養成大学に入ってきます。ところがこの進学校が曲者です。理科の時間に実験をやりませんから。入試に無駄な時間になるので、観察・実験はやらないで、問題集ばかりやらせる。

鷲山　理科で、観察・実験をやらないのは本末転倒でしょう。

林　有名で学力があると思われている進学校が最悪です。それから中学校も、時間がないものですから、熱心に頑張る先生は何とか観察・実験を入れようとしているのですが、内容量が多いので観察・実験では進められない。講義が入らないと。なるべく観察・実験をしたくない先生に教わると、講義ばかりです。穴空きのマークシートなどやって、テスト対策中心で覚えこまされる。理科って暗記教科です、と生徒も平気でいいますからね。それで中学・高校を育って、受験科目は、理科は最低しかとらない。理科専攻でないかぎり理科とは縁がないわけです。そして卒業して小学校の先生になって、3年生のクラス担任になる。「理科をやってもらいますからね」となって、「えっ」ということになる。

［大学で理科教育を受けないまま、小学校の先生に］

鷲山　以前の小学校教員養成は、国立大学で責任を持ち、教育学部で理科も含めた全教科をしっかり履修していました。その内に、全教科とらなくてもいい、選択でよいと基準が緩められました。そして私立大学が小学校教員養成に参入しました。

　私立は、設備でお金のかかる理科教育などは重視しませんから、「子ども学科」などは徹底した文系で、理科的センスは育ちませんよね。

　大学で少しでも理科をやっていれば、勘が働いて、道が見えて来るのですが、それがないのは辛いですね。

林　ですから今、北区内で理科の研究会をやっていて、これは理科の先生だけでなく、一般の先生にも入ってもらえるよう工夫しているのですが、実技研修会をやると、もの凄い数が来ます。昔だと、「今日は10人来た、二桁で凄い」ということだったのですが、今では50～60人来ます。みんな困っていて、藁をもつかむ気持ちなわけです。特に若い人は、判んないから恥ずかしいのではなくて、判んないから教えてと率直にやってきますね。

鷲山　理科教育の歪みもあるし、教員養成の在り方も、規制緩和の弊害が出ている。昔の方がまともでしたね。

林　今の若い人たちは、本当に本来の理科教育から疎遠です。実技研修会の例は、実践的な理科教育がいかになされていないかの証拠で、それがこんなに小さい区でも如実に現れています。理科の指導力で見た場合の小学校教員は、かなり寒いものがあります。

　これから何とかしないと。現職教育も、理科教育に傾斜してやってもらわないと、理科教育の指導力が十分保てません。

鷲山　私たちの世代だと、自分を振り返っても、中学も高校も理科はしっかりやりましたからね。地学がなかったのは、今となって見れば、地震や温暖化で関心が増して、残念だという思いが残ります。

林　大学ではやらなかったかもしれませんが、文科系の人も中学・高校ではちゃんと教科としてあり、やらないと未履修になりますからしっかりやりましたね。また、現場に入っても、一緒に教材を準備しようよという余裕が、実際ありました。先輩の教員が若い教員に、今度の教材をつくろうよという時間が、3時半からテニスやって、夕方になっても、あったんですね。いい意味でのゆとり、遊んでいるのでない、いろんなことを考えたり、次の準備をする、ゆとりは欲しいですね。

　ここで、間違えて欲しくないのは、「そんなに理科に苦手意識のある教員ばかりならば、専科制にして理科を得意とする教員にだけ指導させればいい。」という考え方です。

　小学校の場合、子どもたちの生活全体の中でいろいろな活動を有機的に関連させながら教科や領域の指導を行っていくことが基本となります。だから教員免許の「小学校全科」にも、その理念が全面に掲げられています。もしも、専科制にしたら、子どもたちの日々の活動を連続して見ている担任の教員が理科の指導をできなくなる訳で、今までに改善しなくてはならないと指摘されている「理科の時間だけ理科の学習をしている」というマイナス面が、益々顕著になってしまうだけなのです。教員にとっても、「理科については、理科専科が考えて指導すればいい」という状況になり、国を挙げて、学校を挙げて、全教員が理数教育の推進に努力という施策とは正反対の方向に進んでいってしまいます。小学校理科の内容ならば、専科に押し付けるほどのこともなく、全教員がある程度の研修を積めば誰でも十分に指導できる程度の内容だと思います。「ある程度の研修」を教育委員会や各学校が実施していけばいいだけのことです。表層的・対処療法的な施策でごまかそうとせず、小学校教育の本質的な機能に合わせて研修の充実や理科支援員の完全配置など教育条件の整備を行っていきたいものです。

鷲山　一度でも、学んだり、実験したり、観察したり、飼育したりした経験がありますと、勘が働きますね。

　私も、蝶を卵から育てたり、貝のでる地層を調べたり、岩石を集めたり、電線を巻いてモーターを作ったりの経験はありますから、今から小学校や中学校で教えなければならなくなっても、これらの分野なら勘が働いて、勉強し直せば興味深く教えられる自信はあります。

　しかし、星の観察はしたことはないので、全く勘が働きませんから、実地で教えるのには自信がないですね。理屈で覚えて、教え込むしかなくなります。

　望遠鏡で星や月や惑星を見たことのある人は、今の季節ならこの星座が見られる、この時間ならアンドロメダ星雲はどこにある、土星の見えるのはこの方向、と勘が働きますよね。これが大事だと思います。研修していけば、カバーはできるわけですね。

林　十分ではないですが、はじめの第一歩となることは間違いありません。

［理科の設備費・備品費、消耗品費の貧困］

鷲山　ところで、それを支える実験道具とか機材とか費用はどうなっているのでしょう。

林　惨憺たるものですね。費用は全くお粗末です。文部科学省の責任だけではなくて、地方公共団体も、理科の設備整備に関しては、一番低い状態で抑えていますね。国が2分の1負担でなく、全額負担をするようになれば違うと思いますが、2分の1しか出さないから、地方公共団体はもっと出さないというふうになるのですね。

鷲山　学校の理科の費用というのは、決まっているものですか。

林　何もない所を整備しようとしますと、学校の規模にもよりますが、標準的に考えて備品で最低500万円ですね。毎年の消耗品は本来だったら20〜30万円はかかるはずです。

　この前、大規模補正予算がついたのですが、備品はその時も多くの市町村で100万円ついたらいい方ですね。前からあるものが使えますから、500万円はいらないですが、その時の試算で300万円くらい必要でした。毎年のランニングコストにあたる消耗品が20〜30万円ですが、そうできないから、10万円か5万円で、誤魔化し誤魔化しやっています。

鷲山　それは小学校の場合ですね。

林　中学校に至っては、もっとひどいですよ。理科教員が自腹で材料を買って来て、実験をさせている学校が結構あります。予算

がつかないから。それも生徒に実験をさせたい。そうしている先生は少なからずいる、むしろ多いですよ。そこまで行っちゃっているのが実状です。中学校の理科設備費の充当率は、小学校より悪いですね。

鷲山 小学校では理科大好きな子どもたちが多いが、中学になると理科離れが進むといわれますね。いろいろな原因があると思いますが、お金の問題が大きいですか。

林 大きいですね。理科の実験がいろいろ出来れば、どんどん関心は広がりますからね。理科本来の持っている活動は楽しいものですから。理屈以前に、きれいなものが見られて、面白いものが見られて。

鷲山 体験教育が大事だといわれていますが、理科は最もよい体験教育ですね。体育、習字、音楽、図工のように体で受け止めて学ぶものが充実していることは大切です。

林 特に小学校教育ではそうですね。

鷲山 いろいろ問題を伺いましたが、理科教員についての問題は他にありますか。

林 そうですね。専門があると、そこだけギューと特化して教えてしまう傾向はあります。小学校の場合、広く、ポイントを押さえつつ、バランスよく教える必要があるのですが、専門好きでついついそこを沢山教えてしまう。これは年配の人に多いですね。

鷲山 先生は、東京都小学校理科教育研究会の会長をされ、全国小学校理科研究協議会の会長も務められました。どんな課題を感じておられましたか。

［思考する力を］

林 先生方はみなさんよくやっておられるのですが、課題は、「観察・実験だけ」になってしまう傾向です。そしてその結果を覚えてもらうことだと思っている人が結構多い。そうではなくて、理科は考える力をつけたい、科学的見方や考え方を身につけて欲しいわけで、目標は科学的思考力です。しかしそうはなかなかいかないで、教科書に載っている観察・実験をやって、覚えてもらうのが理科教育だと頑なに思っている人が多いですね。それに対して理科教育はそうではないですよ、と言い続けているのですが、そう言い続けるだけで一生終わってしまう気がします。

鷲山 しかし、学習指導要領にはそう書いてないでしょう。

林 学習指導要領には、子どもが問題を発見しつつ、問題解決型の、つまり探求型の学習を組み立てさせるようにして、理科の対象である自然の事物・現象を通して学ばせろとちゃんと書いてありますよ。しかし、なかなかそのようには行かないですね。小学校で考える力のついていない子は、中学校に行って、話の多い講義調の授業についていけなくなります。考える力がないから、先生が図を書いたり、ビデオを見せたりという言葉中心の授業の中で、あれはこういう場の想定で、こういうことを組み立ててやる実験なんだということが、考える経験のある子は、自分の中で再構築できますよね。しかし理科的に考える力が育てられていなければ、そういうことができません。このことに関して小学校に罪がないわけではない。

鷲山 それは根源的な問題ですね。

林 問題の始まりはそこにあります。中学校でも考えさせないで、覚えさせる。高校は観察実験などほとんどやらない進学校が隆盛を極める、大学はコース選択ですから、選ばなければそれで終わりです。

鷲山 その辺の硬直化したパターンを解きほぐしていく。そして知識中心ではなく、思考力中心の授業組み立てを実験・観察を入れつつどう作って行くかですね。

林 東京都でも全国でも、今、研究の軸足がそこにおかれています。

［学校・家庭・地域が共に目指す目標を明確に］

鷲山 理科教育の問題を指摘していただきましたが、では先生が今、教育全体を考えて、直面している課題は何でしょう。

林 教育の内部にもジレンマがありますし、家庭の中にもジレンマがありますし、社会にもジレンマがありますね。つまり、公教育・家庭教育・地域教育の三つが、それぞればらばらに内部にジレンマを抱えてしまって、全体としてこういうものを目指していこうよ、という形になっていないことですね。

それぞれが勝手に動いている。特に家庭には介入しないし、させないではないですか。政府も、役所も。プライバシーとか、個人の自由とかいって、対応がいい加減ですよね。野放しでしょう。

鷲山 学校教育と家庭教育と社会教育が有機的に結びついて、よりよい人間形成や、新しい社会形成へとつながっていかないということですね。

林 よく冗談で言いますが、免許なくてもできる仕事はあまりないのですが、親は免許なくて出来ますよね。学校と家庭と社会のトライアングルの中で、家庭教育だけが、今、非常にひどく落っこちている。これは私自身の親としての反省にもなりますが、そこがどうも三つの教育の機能がうまくまわらない原因にもなっていると思いますね。

鷲山 先生のお話から、いろいろな問題の所在が明らかになりました。じっくりと問題と取り組んでまいりましょう。今日は、ありがとうございました。

（2012年4月27日　東京都北区立
滝野川小学校校長室にて）■

地方支部からの報告

平成23年から24年にかけて新潟、広島、神奈川、山梨、鹿児島で新たに支部が設立された。その5支部からの報告、さらに先輩支部から活動報告を寄せてもらった。支部の数は合計で16となった。

新潟支部

産みの苦しみを味わっています。

新潟県支部は昨年度、辟雍会加入者の確保で条件を満たし、辟雍会新潟県支部として承認され、立ち上がり会を実施しました。その後会員の確認の作業を進めていますが、事務局長の転勤もあり名簿の完成にまで至っていない現状です。特に現職教員が事務局をまかなっていますので、教職員以外の皆さんの情報が少ないのが悩みです。

確認としては次の内容で進めています。

①辟雍会に加入し、新潟県支部にも加入する。

②辟雍会への加入は検討中だが、新潟県支部には加入する。

③辟雍会の加入、新潟県支部の加入は検討中だが、名簿に載せることは認める。

加えて現在、会費もありませんので、メールでの連絡を主流にするためにメールアドレスをたずねているところです。

今年度中には現時点の名簿を完成して、2月に全員に案内を出した集まりを実施する予定です。

（事務局長　木澤　英二）

広島支部

〈設立総会の報告〉

辟雍会広島県支部（広島辟雍会）の設立総会が平成23年10月30日にシェラトンホテル広島にて開催されました。13名の同窓生が集い、また東京より鷲山恭彦会長、池田克紀事業部長にご列席賜りました。

会の冒頭の広島辟雍会設立の経緯説明に続き、鷲山会長にご挨拶いただきました。広島の地で同窓生の輪が広がっていくことを期待したいとのメッセージに、設立の喜びをかみ締めると同時に責任の重さを実感し、身が引き締まる思いがしました。

議事では、次期総会までの仮役員の選出が行われ、会長に川本正行さん、副会長として入澤雅典さん、羽原泰二さん、事務局に田中信也の就任が承認されました。あわせて仮役員が会則などについての協議を行うことが承諾されました。

議事後の懇親会においては、参加者一人ひとりが自己紹介と近況などの報告を行いました。会長に就任した川本さんは、広島で同窓会組織を作りたいと二十年以上に渡り、多くの同窓生に声をかけてきたことと、今回の設立の喜びをお得意(?)のダジャレを交えながら熱く語っていらっしゃいました（実際に今回のほとんどの参加者が川本さんとのつながりによって集うこととなりました）。

また、思い出深い、懐かしい品々も披露され、川本さんはご自身の合格通知や入学金、授業料の領収書、学生証などを、松浦綾さんは卒業時に同級生と作ったというカレッジリングをお持ちくださり、一同の関心を誘っていました。

そして、総会が開催されたこの時期は、同窓生の栗山英樹さんが北海道日本ハムファイターズの監督就任要請を受け、話題になっておりました。栗山さんと野球部同期の田原潤さんが参加していらっしゃったこともあり、マツダスタジアムで実施される交流戦に監督激励をかねて応援に押しかけてみてはどうかなどの意見が出て、大いに盛り上がりました。

懐かしい思いに包まれた時間も束の間、最後は全員で肩を組み、学生歌「若草もゆる」を合唱しました。次期総会までに新たな同窓生を発掘（?）し、より盛大な会になることを願いつつ、閉会しました。

（事務局　田中信也）

神奈川支部

歴史ある開港の地・神奈川は逞しく歩む

会員の抱く意識、辟雍会が学芸大の同窓会であること、その高揚の絶好の場として神奈川の地にて支部初会式が開催されました。

２０１１年11月26日、ミューザ川崎のグループ作品展の会場で開催しました。学藝意識が皆の心に強くあるからです。

参加者は十一名（同意24名）で楽しい和合の会も行いました。学生時代の話、今の大学の状況、これからについて意気投合しました。

〈会員の声〉

・神奈川支部が設立されることで様々な情報交換ができる場になれば。

・理科以外の方は存ぜず。同窓会？

・母校の支援、親睦、地域教育文化の振興への寄与等に少しでもお手伝いのできることがあればと思っています。

・教育に関心のある方と繋がり、出会いをきっかけに仲を深められたら良いです。

・狭い世界多くの方と情報交換ができると嬉しいです。

・神奈川県内の同窓諸氏の連携強化を望みます。

・特に元気な子どもを育てることに一役買えれば。

・設立についてはいいことであると考え、期待しています。

・一学年当たりの人数が少ないので、年代を越えて「学藝大」という繋がりで集まれたら嬉しいです。

・お世話様です。心のよりどころになるような同窓会。

・卒業して教員をされている同士交流を増やせたら。

　神奈川は、同窓会として横浜地区、川崎地区等「獅子の会」、県立学校管理職等、それぞれの地区ごとに発足、活動しています。　辟雍会が誕生してからの思い、願いを一つに、を心し、逞しく歩むことがこれからの神奈川支部の務めだと感じています。若き大学の卒業生に社会での生き方が、悩み苦しみではなく、存分に力を発揮する。そのための支援者となる会となれば・・・。

山梨支部

　去る8月17日（金）記念すべき山梨県支部が発足しました。話が起こってからマル2年の年月を経てです。

　話は遡って、会長の鷲山先生と小平寮の同窓会の帰りに偶然にもお会いしたのが、丁度、2年前の夏休みでした。先生は私の学生時代、大学の寮担当の委員をされていました。木造の小平寮が現在の鉄筋に建て替わる時で、私たち寮委員は設備や内部の備品のことで大学とよく交渉に行きましたので、それで先生とよくお会いしました。第二外国語も先生のドイツ語を取ったので、30年振りにお会いしても、よく覚えていて下さいました。その時に、辟雍会支部設立の話をしていただき、乗り気になったのですが、その後、曖昧になったまま、連絡は途絶えていました。

　そして、2年後の今年のゴールデンウィーク、私の入っていた生物学教室主催の「自然散策会」で、偶然にも鷲山先生と再びお会いしたのでした。先生が植物や昆虫にも関心があり、北野先生や片山先生と親しいのには驚きました。こうなってきますと、どんなに弁解しようとも、今夏に開かざるを得ない状況に至ったのでありました。

　山梨県の教員は、東京に近くとも地元の大学出身者が多く、同窓生を見つけるのには一苦労でした。伝手を頼りにたどって、やっと7人程度に声をかけました。

　東京から鷲山先生と二宮先生がいらっしゃるとのことで、石和温泉駅の近くの居酒屋に10人程度の部屋を取り、いよいよ開催というところまでこぎつけたのでした。当日は、甲府盆地特有の蒸し暑い中、何人集まるのかと不安に待ち受けていますと、次々と見知らぬ方々が駆けつけ、総勢18人が狭い部屋にひしめき合う状態になっていました。

　大皿の料理をみんなでつつき合いながら、20代から50代までの方々が、初対面とは思えない程に自然に話が進んでいきました。学内の下に張り巡らされているという地下道の話や、ユニークで変わったサークルの話題、駅周辺の変容や、現在の学生気質に至るまで、様々な話に花が咲きました。

　みんな昔話は大好きです。20代の若者に、現在の大学の様子を聞いて驚いたり、感心したり、興味は尽きません。閉会までの3時間余りは、瞬く間に過ぎ、来年の再会を約束して解散しました。

　本県は人口も少ないので、現在の勤務校を聞けば大概のことはわかります。それぞれの地区で同窓会の話を広げていただいて今後、会員が増えていくことを期待します。今回は私の居住地を中心に集まりましたが、次回は甲府市内でもう少し広い場所を確保し、第2回同窓会を開催したいと思います。

（文責　1983年卒　河野みな子）

鹿児島支部

『支部設立準備委員会』を開催

　辟雍会会長の鷲山恭彦先生のご案内で鹿児島にも辟雍会の支部を作ったらどうかということになり、24年10月7日、鹿児島市内のホテルに鹿児島在住の東京学芸大学関係者が集まりました。学長の村松泰子先生、辟雍会副会長の山本一雄先生、鹿児島が郷里の東京学芸大学の出口利定先生も出席下さり辟雍会の概要をお話いただきました。

　鹿児島の参加者のほとんどが、辟雍会

の存在を初めて知ったという状況で『へきようかい』の読み方から学び、それが中国の古い言い方でアカデミーを意味することを知りました。もっとも現在の中国で「辟雍」は殆ど通じないようですが。大学時代の思い出話をするなかで同窓会の存在意義を確かめ合い、支部を立ち上げて毎年秋に鹿児島支部の会合を開いていこうということになりました。

　これまで、鹿児島大学教育学部などでは、東京学芸大学に関係のあった方が転入・転出した時に懇親会を開催して、同窓の好みを交わしてきました。東京学芸大学に関係のあった方とは、学生・院生・教職員として東京学芸大学に通った方という広義の懇親会でした。

辟雍会の対象となる会員の概念も同様なものであることも確認できました。

最近の卒業生は、辟雍会に入っていて、卒業する時には辟雍会の会員として卒業していることも分かりました。

２００４年に会誌１号がでているようです。したがって、10年以上前の卒業生は、卒業してから辟雍会ができているので、多くの方が会の存在に気付いていないということも分かりました。

支部の活動として会合（懇親会）を年に１回持ち、東京学芸大学の関係者としての親睦・連携を強め、東京学芸大学を外から支援して行くことになりました。

　今後、辟雍会の存在を鹿児島在住の卒業生に知らせていくことを確認し合いました。もっとも、誰が東京学芸大学の関係者なのかを探し出していくことからはじめなければいけません。個人情報の保護ということで名簿の入手も困難です。会員対象者を、知り合いを通して捜していくことになります。時間をかけてゆっくり進めていこうと思います。

支部の組織として

支部長　鹿児島大学　八田明夫
副支部長　鹿児島国際大学　蓑毛良助
副支部長　鹿児島大学　今林俊一
副支部長　鹿児島中央高等学校　小倉眞一郎
事務局長　鹿児島大学　雲井未歓
事務局次長　志學館大学　山喜高秀
事務局次長　鹿児島市役所　山下俊江
監　事　鹿児島国際大学　畠澤郎
監　事　鹿屋体育大学　森司朗

がきまりました。

東京学芸大学の関係者情報をお持ちの方はお知らせ下さるようおねがいします。

（文責：八田）

北海道支部

第４回総会が８月５日（日）札幌市中央区のチサンホテル札幌で盛大に開催されました。

【第４回総会】

北海道在住の同窓生相互の親睦を図るとともに、広く教育及び文化の振興・発展に寄与することを目的として平成21年８月に設立された「辟雍会」北海道支部は、鶴丸泰生会長（S38年卒）を中心に、「辟雍」に込められた明達諧和な雰囲気（前向きであり、明るく開放的なこと）を大切にしながら、楽しく有意義な集いを積み重ね、今年で４年目を迎えました。設立当初は会員名簿の作成がたいへんでしたが、各方面からの協力をいただきながら同窓生の輪を広げ、現在は56名の会員で構成されています。

　今年の総会は、会長挨拶の後、支部規約の確認、佐藤洋副会長（S44年卒）による「辟雍会」全国代表者会議報告、会計・監査報告と滞りなく進行しました。また、次年度の開催日程（平成25年８月３日予定）の確認とともに、「栗山英樹氏日ハム監督就任激励会」の開催について、数馬田敏事務局長（昭和47年卒）より経過説明を行いました。北海道の広域性もあり、昨年までの参加数は15名程度にとどまっていましたが、今年は33名の参加と倍増し、改めて「栗山監督就任」への期待をうかがい知ることができました。

　そうした中、全国各地で教職に就き、高校野球等に携わっている卒業生への激励を目的とした視察を毎年行っている東学大硬式野球部ＯＢ会の役員等の皆さんが、後輩である栗山監督を激励するために来道し、札幌ドームでの東北楽天イーグルス戦を観戦するとの朗報が支部事務局に入りました。早速、ＯＢ会の杉山雅勇会長（昭和46年卒）に連絡し、栗山監督（所属事務所）への依頼をお願いしたところ、杉山会長からの強力な後押しのおかげで、「状況によっては出席可能」との回答をもらうことができました。その後、ＯＢ会との調整を進め、杉山会長をはじめ、東学大で野球部部長を務められている立木正教授（昭和44年卒）を含めたＯＢ会役員等12名による「北海道視察団」と「辟雍会北海道支部」が合同で、「栗山英樹氏日ハム監督就任激励会」を開催する運びとなりました。

楽しい時間は瞬く間に過ぎました

　激励会の結びに、栗山監督の更なる活躍を願い、参加者全員で心温まるエールを贈り、学生歌「若草もゆる」を大合唱しました。（激励会の模様は４～５ページ参照）。

　参加者の想いが一つになり、母校で学んだ年代に違いこそあれ、東学大という学びの園に相つどうことができた幸せを、全員が改めてかみ締めました。名残惜しい中、野球部ＯＢ会の大野貴義顧問（昭和36年卒）の発声による閉宴の乾杯で、お互いの健闘を誓い合いました。

【今後の支部活動に向けて】

今年の集いは、4年目にして初出席の会員も多く、北海道支部の輪を広げることができ、二重の喜びとなりました。支部会員の多くは、大学、高等学校、小中学校で教鞭をとっていますが、民間企業等で活躍されている方もいます。また、ご勇退後、第二の人生を歩まれている会員の方々も、それぞれのキャリアを活かし、学校教育・社会教育の分野や、地域におけるコミュニティ活動に積極的に携わるなど、正に「生涯教育」・「生涯学習」を実践されています。

今後も、支部設立の趣旨を踏まえ、会員相互の交流を一層活発に進めるとともに、支部のスローガンである「カンバック・サーモン！北の大地・北海道は、皆さんの凱旋を待ってまーす」の想いを大切にし、一人でも多くの後輩会員を温かく迎えたいと思っています。

「辟雍会」の益々の発展と、全国各支部の会員の皆さまのご健勝を祈念申し上げるとともに、後に続く後輩諸君が、我が母校・東京学芸大学の良き伝統を引継ぎながら、それぞれの分野で活躍されることを心より願っております。

（会長　鶴丸　泰生）

青森支部

「夏季総会の開催」と「支部主管事業実施の提案」について

平成24年7月２８日（土）、青森市内において、平成24年度夏季支部総会・懇親会を開催しました。

総会では、「平成23年度決算・24年度予算」など、例年同様の案件について審議・承認された他、今年5月に開催された辟雍会本部理事会において、当支部から「支部主管事業の実施」についての提案を行ったことが報告されました。

この「支部主管事業」については、以前から、支部の仲間が集まるたびに話題になっていたことであり、平成21年の小金井祭に当支部が参加・出展をさせて頂いたことで、ひとつの形になったわけでありますが、その後も、ことある毎に「本部・大学との協力のもとに、支部がある道県において、何かしらの事業・イベントを開催することが出来ないものか…。」といった声があがっていました。この声に応えるべく、当支部の役員を中心に、電子メール等による意見収集や打合せを行い、「提案」としてまとめ、本部理事会にお示しさせて頂いたところであります。

具体的な構想案としては、ホームカミングデーで行われているものを踏襲して、「学校教職員や保護者、また教職員を目指している学生・生徒が一緒に楽しみ、共感できるようなテーマ」のもと、「講演会」や「音楽演奏会」などを、支部のある道県において、同支部主管のもとに開催してはどうかといった内容になっております。

来年、辟雍会が会の発足から10年という節目を迎えるにあたり、辟雍会並びに東京学芸大学の知名度アップや大学への優秀な学生確保を、これまで以上に図るという意味からも、地方での事業・イベントの開催がひとつの有効な手段になるのではないかと、支部会員一同が考え、具体的提案をするべく検討を重ねているところであります。

（青森県支部幹事長　矢野　政弦）

富山支部

富山では毎年８月に、「獅子の会（辟雍会富山県支部）総会」を開催しています。今年は８月23日（木）に開催しました。29名の参加者があり、例年のように楽しい会となりました。初めて参加される方も毎年いらっしゃいますが、サークルでつながっていたり、下宿が近かったり、同じゼミだったりと共通する部分も多く、二十歳前後の同じ年頃を、同じキャンパスで過ごしたということだけでつながり合うことができるのが、この会のすばらしさであると思います。ご夫婦での会員も何組もいらっしゃいますが、昨年度からは親子での参加もあり、ますます充実した会となっています。

富山県の「獅子の会」は、昭和50年頃に、親しい仲間数名の不定期な集まりだったそうですが、平成２年に名簿を作成して以来、毎年定期的に総会を開いています。今年度、県内在住の名簿搭載者は２６４名となっています。

このような会が発足したのは、「人の力」によるところが大きいのではないかと思います。会の草創期からかかわっておられる、元会長の大岩久七先生（昭和47年国語科卒）、前会長の石上正純先生（昭和49年保健体育科卒）はもちろん、副会長さんや歴代の幹事の方々の努力があったからこそだと思います。「よし、やろう！」と声をかけるリーダーがいて、それに応え、手伝うフォロアーがいらっしゃったからだと思います。がんばっている人の「意気に感じて応援する心」、これは私たちが教員として大切にしていかなければならないものの一つではないでしょうか。幸い、県内の同窓生

にはそういう気風があったので、当時、教育行政にかかわっておられた先生方のご尽力で名簿が作成され、平成2年に60名あまりの参加者とともに、総会を開催することができたのだと思います。

また、長く続けてこられた一つの要因に「制約が少ない」こともあるのではないかと思います。何のしがらみもなく、とにかく同窓の者が年に一度集まって楽しく語り合いましょうという趣旨がよかったのではないかと思います。

ただ、問題点もないわけではありません。当面の問題は、卒業生の把握が難しいということです。現時点では、「あの人も卒業生だよ」という口伝えの情報にたよるしかない状態です。しかし、これでもあるのかもしれません。私たち「獅子の会（辟雍会富山県支部）」は、これからも同窓の人の輪を大切にし、少しずつ広げながら、末永く会を育てていきたいと思っています。

（獅子の会（辟雍会富山県支部）事務局
富山大学人間発達科学部附属小学校
草野　剛）

静岡支部

「静岡辟雍会」２年目ＮＯＷ

「昔、学校現場にいるころ、静岡県は静大卒の天下で、学大卒が少なくて心細かった。」

「やっと静岡辟雍会ができて、うれしくって心強くって、即入会でした。」

「在籍期間は違っても、なぜか通じ合う仲間がいる。不思議な縁（えにし）で繋がっている同窓生っていいなあ。」

「久しぶりに小金井に行ったら、正門の欅がどえらく大きくなってて、年月の経過が身に染みたなあ。」

・・・等々口々に、今年の総会・懇親会でも老（失礼！）若男女35名が集結し、1年1回の逢瀬を楽しみました。遠くは松本にお住いの関氏も、乗り換え乗り換えて、遠く会場の掛川まで足を運んでくださいました。

さて、静岡辟雍会が発足したのは昨年3月。一昨年（H22）、鷲山会長から遠藤氏（現静岡辟雍会会長）に発足の要請依頼があり、数人が声をかけられ「準備委員会」が立ち上がりました。しかし、遠藤・武藤を除いて皆現職で活躍中、二人で準備するしかないと・・・。

それからが大変、いつ設立総会を開催するのか、逆算して、何をいつまでにどのように準備していったらよいのか・・・先行している県の事例を参考に、鷲山会長からの助言を頂戴し、辟雍会本部のお二人に助けられつつ・・・・・。お陰で、準備は一気呵成、火がついたように足早に進み、約６００人いるはずの静岡在住or出身者の内、1回目の集約で40人、二回目の集約で 60人から「賛同・総会出席」の返事を頂きました。

明けて平成23年3月、東日本大震災から2週間後でしたが、「設立総会」を開催することができたのです。総会では、鷲山会長の祝辞兼御講話を拝聴後、60人全員が学生時代の思い出や現況を語り予定の時間を1時間もオーバーして親交を新たにしたものです。そして、現職組が集まりやすい8月の最終土曜日に毎年総会を開催することを約束して別れました。

当日決定・静岡辟雍会役員

会長　遠藤亮平（昭和45　D数学）
事務局長　武藤葉子（昭47　A保体）
副会長　原　博男（昭31　乙国語）
同　小川徹郎（昭45　A社会）
同　勝田敏勝（昭51　A国語）
副事務局長　豊島元江（昭47　D保体）
同　佐野恵三（昭53　D数学）
会計監査　高橋裕一（昭59　A保体）
〃　村松一寿（昭60　A保体）

半年後の平成23年8月、「平成23年度（第1回）総会・講演会・懇親会」を静岡市のグランドホテル中島屋で 45名の出席を以って開催。講演会では原田誠治元静岡新聞主筆から「教育界に期待すること」の提言を数多く頂き、学大卒業生への絶大なる応援歌として受け止めました。その後、お待ち兼ねの懇親会を持ちました。自由席でしたが、二度目の逢瀬ということで意気投合して談話が弾みあっという間に2時間が経過して、来年の再会を約束して別れを惜しみました。

そして、1年後の今年（平成24年）8月、「平成24年度（第2回）総会・講演会・懇親会」を開催。設立総会の折、会場は東部・中部・西部持ち回りという決定事項がありましたので、今年は掛川市を会場にしました。総会出席者35名。昨年より10名の減少でしたが、松田正幸袋井デンマーク牧場まきばの家・こどもの家施設長の愛あふれる実践講話は私たちの心の琴線を振るわせ生きる力を与えてくださいました。その後、懇親会には参加できない10名の方が、近況や熱い思いを語り、学大卒業生のレベルの高さに感動しました。場所を変えての懇親会は更に燃え上がり、昭和30年代卒業組の学生時代の豪快な話は聞く側も興奮し大いに乗りましたし、若い世代の皆様の今の活躍の様子も次々に披露され、和気藹々の懇親会はピークに達し名残りが尽きずの閉会となりました。

「ああ、今年も大成功だったな…」と自

己満足し、感動の余韻に浸っているうちに秋を迎えていました。ただ今「静岡辟雍会」順調に進行中!!!

偶（たま）さかの　原稿書きは至難なり
ふと見上ぐれば　ゆきあいの空

（静岡辟雍会事務局長　武藤 葉子）

岡山支部

「岡山辟雍会」懇親会

5月19日　岡山市「アカバナ」で開催

5月19日に東京学芸大学岡山辟雍会懇親会を開催しました。

昨年、『辟雍会』（東京学芸大学全国同窓会）会長の鷲山恭彦先生と理事の池田克紀先生が東京から来岡され、正式に岡山支部として辟雍会に加盟し、発足することができました。1月28日に第二回東京学芸大学岡山辟雍会総会を開催しましたが、その時期に参加できない方からの要請があり、5月19日に懇親会を開催させていただきました。

当日は、大変お忙しい中16名の方に集まっていただきました。今回新たに2名の方が参加され、加盟以前の会を含め、述べ44名の参加となりました。今回は、昭和36年から平成13年までの卒業生たちが、学生時代に戻り、共に過ごした東京都小金井市での思い出話に花を咲かせました。次回平成25年1月26日（土）同所での再会を確認し、名残惜しくも盛会のうちに会が終了しました。毎年参加者も増えていっており、今後もできるだけ多くの方に参加していただければと思っています。

（事務局長　宰相 裕一）

鳥取支部

鳥取県では鳥取県支部結成以前、平成元年に「東京学芸大学鳥取県同窓会」を立ち上げ、今年度で24年目を迎えます。この間、東部、中部、西部の3地区で順に、年に1度の懇親会を開催してきました。鳥取砂丘は東部地区、中国地方最高峰の大山（だいせん）やカニやマグロで有名な境港は西部地区、最も危険な国宝鑑賞とも言われる投入堂（なげいれどう）がある三（み）徳山（とくさん）は中部地区に位置します。

今年度鳥取県では「まんが王国とっとり」の建国を宣言し、様々なイベントに取り組んでいます。ゲゲゲの鬼太郎の作者水木しげる氏、名探偵コナンの作者青山剛昌氏をはじめ多くの作家を輩出している関係で、マンガ文化を世に広めサブカルチャーに親しんでもらうとともに、鳥取県の魅力を発信しようというものです。11月7日～11日には世界のマンガ家を集め、「第13回国際マンガサミット鳥取大会」を米子市で開催します。

県同窓会ではこれまで、会員研修の一環として、県同窓会10周年記念大会では栗山英樹さん（現プロ野球北海道日本ハムファイターズ監督）を、20回大会には当時学長の鷲山恭彦会長を招いて講演会も開催しました。

直近の同窓会は、平成23年2月25日、米子市。これまではホテルや旅館等を使っていたのを思い切って焼肉店で開催。中盤あたりからは席も乱れ、やっぱりいつも通りの賑やかな情報交換となりました。また、昨年度は本県同窓会会長小谷次男氏の叙勲（瑞宝双光章）という慶事もあり、この席で記念品を贈りお祝いしました。

今年度の第24回同窓会は平成25年2月、倉吉市で開催予定です。中部地区会員で懇親会兼準備会を開き、役割分担しながら準備を進めています。また、来年度は25年目を迎えるため、記念大会の構想を練っているところです。

高知支部

四年ぶりの同窓会

辟雍会高知県支部では、平成24年1月20日に久しぶりの同窓会を行いました。平成19年6月に辟雍会高知支部の設立総会のために、鷲山恭彦会長（当時は学長）に、わざわざ高知までお越しいただいたことが懐かしく思われます。

その間に同窓会を1回（平成20年1月）しか開催することができず、心配していたところ、平成24年1月、鷲山恭彦会長から、1月20日（金）に高知に行きますとの連絡がありました。高知学園短期大学で講演をされるためとのこと。

急遽、「鷲山恭彦先生を囲む会」と4年ぶりの「辟雍会高知県支部同窓会」を開催することができました。案内を出した30名ほどのうち出席者は11名（A類保体 大塚剛弘、D類数学 中山泰志、G類音楽 舟橋あかね、甲類理科 山岡和興、A類理科 若江卓恭、C類特殊教育 是永さん、B類数学 松山宰、D類書道 大西正子、B類英語 下村真知子、D類保体 西内一人、A類保体 宇賀孝篤）でした。さらにまだ学芸大の同窓生の方々がおられるとの情報をいただきました。少しずつ前に進んでいる感じがします。■

各部活動報告

組織部

・支部設立事業

鷲山会長が就任以来意欲的に推進して頂き、昨年まで14支部が設立されていました。本年も広く活動され、十指に余る府県が候補としてあげられていました。そのうち、8月17日に山梨県、10月7日に鹿児島県に支部が設立され、現在16支部となっています。

今後は候補となっている熊本、大分、香川、和歌山、群馬、京都、秋田、福井、愛媛、宮崎の10府県の支部設立に向けて活動していく方針です。

10月7日に山本が同行した鹿児島県では、現地12名と、村松学長・鷲山会長・出口教授・私の4名、計16名の参加で、当日は「準備会」として検討し、その結果をもって後日支部結成という予定でした。しかし議論が進むうちに「この場で設立したほうが後日の相互の連絡などもやり易くなる」という意見が出て承認され、鹿児島大学八田先生を代表とし、その他の役員も決定するというスピーディな支部設立となりました。

余談になりますが、現地12名の一人、鹿児島大学の福満先生は、20年以上前の院生時代に東原先生に師事しておられ、東原先生の親友を自負する私も頻繁に研究室を訪れていたのでよく知る仲でした。とても懐かしく、うれしいハプニングでした。予想もしなかった人との再会も辟雍会ならでは、と思われた出来事でした。

・新入生未入会者への入会依頼

去る6月24日に会長名で新入生未入会者とその保護者に宛てて「辟雍会入会についてのお願い」を送付いたしました。その結果、10月時点までに、22名の入会がありました。

・学生委員との交流事業

以下により学生委員との交流事業を実施しました

日時：平成24年7月6日（金）
18：00～19：30
場所：20周年記念飯島会館2階
内容：辟雍会活動の説明、質疑応答、
会食、懇談その他
参加者：学生委員15名、辟雍会より
鷲山会長以下6名

冒頭に鷲山会長の挨拶と辟雍会活動の説明ならびに5名の挨拶と役割・活動内容の説明を行いました、続いて学生委員全員の自己紹介がありました。1年生が圧倒的に多く質疑については、学生諸君は何を聞いたら良いかがわからないような感じでした。

続いて立食での軽食とソフトドリンクをとりながらの懇談に移りました。このころには皆うち解け始め、4台のテーブルでそれぞれ話が盛り上がり、また各テーブルを回るなどして対話の輪が広がっていました。

その中で、「この後は、学生委員は何をしたらよいのですか？」という積極的な質問もありました。組織部としてのみではなく、辟雍会全体としての活動に学生諸君の参加を促し、フレッシュなアイディアとパワーを活かしていくべきであるという感を強く持ちました。

学生委員との交流会の様子

・卒業生への配布物作成

例年1月～2月上旬に実施しており、本年度も同様に作成し、配布する予定です。

（組織部長・山本一雄）

事業部

辟雍会事業部はつぎの事業を行なっています。

1．ホームカミングデー支援事業

東京学芸大学との共催でホームカミングデーのA類理科卒業生の矢崎良明先生の講演会「東日本大震災と防災教育・防災管理」～防災・減災に向けた学校の取り組み～やG類音楽専攻卒業生の宮澤彩子さんのコンサートを行います。

2．学生キャリア支援事業

学生のキャリア支援事業として11月から「企業就職対策講座」の一部として「かち就」を合計10回行います。これは、就職が内定した4年生や卒業生が中心になって3年生に対して企業への就職を希望する学生に就活準備や対策について指導するものです。毎年非常に好評です。また、「かち就」終了後のキャリア支援事業として「ブレイスする―」を行う予定でいます。

3．会員支援事業

会員支援事業として「法律ゼミ」を10回行なっています。これは、学校で起きる様々な問題に対応するためには実践的な法律の知識が必要との観点から行なっています。A類家庭科卒業生で吉川総合法律事務所所属の弁護士の礒崎奈保子先生によるゼミです。

会員同士の交流を促すプログラムとして『X（クロス）』を12月に行なう予定です。昨年度は卒業生、大学生、辟雍会役員の約200人が参加しました。今年も、多くの参加者を予定しています。積極的な参加をお願いいたします。

現役学生が企画する事業に支援しています。昨年は親子向けイベント『ハッピー☆キャッチ研究室』に支援いたしました。今年度はA類ものづくり教育撰修の学生中心の団体「Be Happy!!」が「GOP（ギネスおにごっこプロジェクト）」でギネスに挑戦する大規模の参加者を募る鬼ごっこイベントを企画しています。多くの現役の学生さんの参加者を募集しています。

4．キャンパス環境充実支援事業

東京学芸大学の小金井キャンパスの環境整備と充実を図る事業を支援しています。自然環境に恵まれたキャンパスは学びの園として欠くことの出来ない条件です。卒業生の方には、美しいキャンパスにお越しいただき、散歩を楽しんでいただきたいと思います。

（事業部長・池田克紀）

広報部

広報部は、機関誌『辟雍』の発行と、ホームページの管理運営に当たっています。本年度は、この課題を切り分けて遂行するために、『辟雍』は、遠藤満雄編集長の下で行い、ホームページは、広報部長、会長が岩越敦彦技術担当と相談しつつ内容を考えて行く体制をとりました。

ホームページは、会長からの発信、支部活動の反映、会員の活動報告などで充実を図っていますが、まだ途上であります。ホームページに掲載された記事の内から機関誌に掲載する記事もあり、その選択と相互関係は、遠藤編集長が調整しています。

ホームページの充実と会誌の発行送付との関係は、どのような形にしていくのが最もよいのか、今後の課題として議論を進めているところであります。

（広報部長・二宮修治）

総務部

総務部は次の五項目を柱に、全体的な連絡調整を行っています。

1 全国代表者会議、理事会、幹事会の開催
2 東京学芸大学との連絡・調整の実施
3 既存の卒業生組織等との交流（総会・新年会等）
4 新規会員の入会手続き及び名簿管理業務
5 規則等の整備・見直し

（総務部長・本間久則）

会計部

会計部は予算案の作成及び執行を中心に次の活動を行っています。

1 予算の適正かつ効率的な執行
2 的確な会計事務の実施

（会計部長・佐藤節夫）

第10回理事会報告

平成24年（２０１２）度の理事会（第10回）は、５月26日、大学本部会議室で行われた。冒頭鷲山恭彦会長が、さらにもう２年会長を務めることになったこと、それに伴って役員の一部を入れ替えたこと、またこの２年間、支部の設立、広報活動の充実（情報の発信）を２本の柱にしてやってきたが、支部は昨年、新潟、広島、神奈川で設立されて合計14支部になったこと、また情報発信では「会長室から」と題して学生のインタビューに答える形で特集を組み、また各支部の活動状況などホームページは着実に充実していることなどの報告があった。

定足数の確認の後、大学側から大竹みどり副学長、および初代の辟雍会会長・荒尾禎秀氏が挨拶した。大竹氏は「昨年までは辟雍会理事として、そちら側にいたが、今は大学を代表する立場に変わった。両者の連携は力強くなってきているが、さらに関係を強めて行きたい」といい、会員に向けての情報発信のあり方など、まだまだ研究課題はあることを強調した。荒尾氏は「久しぶりに大学に来たが、東門前の雰囲気は大きく変わり、日々の変化を痛感した。卒業生が母校を訪れるというのはこのような感覚なのではないか」と実感した」、と挨拶した。

鷲山恭彦会長を議長に議事に入り、先ずは各部から昨年度の事業報告がなされた。

総務部

- 平成23年11月5日に全国代表者会議開催。
- 同４月から本年３月まで８回の運営委員会開催。
- 平成23年６月20日大学との意見交換会開催。その他、社団法人・東京学芸大学同窓会の総会、新年会に代表者を派遣。
- 機関誌「辟雍」８号を予算書、決算書、事業計画書などとともに８４３５部発送。

組織部

- 新潟、広島、神奈川に支部設立。
- 卒業生に記念品としてボールペンを贈呈。

広報部

- ホームページの充実。
- 「辟雍」８号の発刊。
- 新入生向けパンフレットの作成。

事業部

- キャリア支援事業として、ワーク語り合い、就職対策講座を計10回開催。
- 会員支援事業として法律ゼミ、法律相談を開催。
- 卒業生と現役の交流プログラムとして「クロス」を開催（６月25日）。約２００人が参加。
- 学生の自主企画「ハッピーキャッチ」の支援。
- ホームカミングデーを大学との共催で実施。

次いで今年度の各部の事業計画（各部）が提案され、議論された。

総務部

11月24日に全国代表者会議を予定。また大学との連携を深めるため、意見交換会を開催。社団法人同窓会との交流も深める。さらに重要項目として名簿管理を徹底させたい、との報告があった。

これに先立ち、入会者数の変遷に関する報告がなされた。これによると平成24年の学部入学者の入会者は７６２名。これに卒業生、大学職員などの入会者を加えると総計で現在の会員数は９２４７人。平成25年には１万人を突破する見込みとなった。ただ、今年の入会者は全入学者の65％にしかならず、平成22年の83％をピークに年々下がってきていることが、大きな課題になってきている。これは入学手続きが郵送になったことが大きな原因と考えられる、と報告された。

これに対して遠藤亮平理事（静岡辟雍会会長）が、「『入会者』という言葉がおかしいのではないか。東京学芸大学を卒業したものは全員同窓生であり、辟雍会の会員ということではないか。会費を払って入会するのではなく、会費を払っていない者は会費未払い者、という扱いでいいのではないか」との発言をした。また青森支部の種市哲理事からは「青森支部では現役の学生も参加させるべく方法を模索している。３年前のホームカミングデーに青森支部としてテントを出すなどの活動をしたが、この実働をしたのは現役学生の青森出身者だった。そこで青森では高校から学芸大に進んだものをリストアップして、青森県人会のような形で学生の把握をしている。本部でも現役学生の活動の場をもっとつくるべきではないか」との発言もなされた。

会計部

1998万円余の収支報告が承認された後、積立金が議論された。財産目録ではこの間7600万円の預金があることが報告されたが、この積立金は当初、収入の半分に当たる1000万円を毎年積み立てて来ていたが、昨年はそれを800万円にし、さらに平成24年度は600万円にするという計画が明示された。この報告に対して、「この積立金の将来的な使用目的は何か」「600万円に削ったというが、まだ多いのではないか」などの意見が出された。これに対し、「明確な使用目的は決まっていない。当初の案では将来同窓会館を建てるための資金という話もあったが、以後その計画は進んでいない」という説明がなされたが、それに関連して、東門隣接の土地を購入するという話が大学当局にあるが、それを支援するという計画はないのか、との質問も出されたが、まだ具体的な方針も出ていない段階では軽々に話題にするべきではない、との話もされた。また積立金の金額については、今後、議論を詰めていく必要がある、ということになった。

広報部

機関誌「辟雍」9号の発刊とホームページの充実という2本の柱で進めて行くが、問題は紙媒体として機関誌を今後どうしていくかが大きな課題である。編集経費もさることながら、この機関誌を会員全員に届けるという仕事が大きな負担になってきている。今年度は9200部発行予定だが、これをどう届けるか、しかもこの数字は毎年どんどん増えて行く。これに代わる媒体としてホームページがあり、大学と同じようにメールマガジン（メルマガ）方式で送れれば、郵送費の問題などは解決する。この際、会員のメールアドレスの取得が優先課題になるが、この問題は大学の協力がなくてはきないことだが、これが進んでいない、という問題提起がなされた。

これに対して、会長から「紙媒体がいずれ限界に来ることは目に見えているが、今現在では印刷された機関誌を楽しみにしている会員も多い。それも大事にしなくてはならない。」との発言があった。

組織部

今年度は鹿児島、熊本、大分、京都、山梨、群馬、秋田、埼玉での支部設立を追求し急ぎたい。また学生員との交流を盛んにしていきたい、との方針が提起された。支部設立の困難さ（各県の情報が少ない、支部を作っても辟雍会には入会しないという問題）についての指摘があった。

この他、事業部からの昨年並みの事業計画の提示があり、収支予算書とともに事業計画書は承認された。

〈名称の問題〉

11月の全国代表者会議に提案されるものとして、会則の一部改正（同窓会を学友会と名称変更するなど）について議論された。この主旨は「同窓会」ではどうしても「卒業生」というイメージが強い。辟雍会は入学時から会員であり、会費も納入する。また教職員も会員であり、卒業生だけに限るものではない。そこを明確にするため、「学友会」と名称変更したい、と提案があり、11月までにさらに議論を詰めることとなった。

〈各支部主管のイベントについて〉

青森支部から、支部主管で講演会、演奏会などのイベントをやってはどうか。青森ではその企画が盛り上がっている。それを各支部が巡回してやっていくようなものにしたらどうか、との提案がなされ、おおいに検討したいということになった。

理事会風景

2012年 第14回 国立大学法人東京学芸大学

ホームカミングデー

日程：2012年11月24日（土）会場：芸術館（学芸の森ホール）

開場：14:00　開会：14:20

司会・進行：加藤富美子 副学長

講演 矢崎良明先生

14:30～15:30

演題「東日本大震災と
防災教育・防災管理」

～防災・減災に向けた学校の取り組み～

昭和52年東京学芸大学Ａ類理科卒業
専門：理科教育、安全教育

東京都公立小学校教諭、八王子市教育委員会指導主事、羽村市教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部指導主事、世田谷区立千歳台小学校校長、板橋区立高島第一小学校校長を経て現在、日本安全教育学会理事、全国安全教育研究会会長、板橋区立志村第一小学校校長。

また、中央教育審議会学校安全部会委員、東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する文部科学省の各種委員を歴任。

主な著書ＤＶＤ（共著等）：子供の安全と危機管理（第一法規）、学校の危機管理最前線（教育開発研究所）、防災時点（築地書館）、学校・子供の安全と危機管理（少年写真新聞社）、安全な学校生活を考える本（小峰書店）、学級で指導する「安全・防犯」ＤＶＤ教材（学習研究社）、ＮＨＫＤＶＤ教材「地震と津波から命を守る」（東京書籍）その他

ミニコンサート 宮澤彩子さん

15:45～16:15

「浜辺の歌」（林古渓作詞　成田為三作曲）
「かやの木山の」（北原白秋作詞　山田耕筰作曲）
「赤とんぼ」（三木露風作詞　山田耕筰作曲）
「くちなし」（高野喜久雄作詞　高田三郎作曲）
「鳩笛の唄」（清水みのる作詞　中田喜直作曲）
「落葉松」（野上彰作詞　小林秀雄作曲）
Una voce poco fa（**今の歌声は**）作曲G. Rossini

メゾソプラノ。新潟市上越市出身。東京学芸大学教育学部G類音楽専攻卒業。東京学芸大学大学院修士課程オペラ科修了。東京学芸大学第54回芸大定期オペラ「ファルスタッフ」メグ・ページ役でオペラデビュー。第55回芸大定期オペラをはじめ出演多数の中、2012年5月二期会ニューウェーブオペラ「子供と魔法」の主役に抜擢された。

演奏会では、学習院大学輔仁会音楽部定期演奏会メゾソプラノソロ、二期会新進家の夕べ、群馬交響楽団「移動音楽教室」、サントリーホール成人の日コンサート2012等に出演。

これまでに、竹内友子、嶺貞子、大野徹也、永井和子の各氏に師事。二期会会員。

主催　国立大学法人東京学芸大学　東京学芸大学全国同窓会辟雍会（へきようかい）

あとがき

　辞雍会機関誌「辞雍」第9号が多くの卒業生や会員の皆様のご尽力により発刊に至りました。関係者の皆様に深く御礼申しあげます。本機関誌の内容を通して会員の皆様方の今後の交流の場の拡大に繋がることを祈念いたしております。一方、東京学芸大学においては、大きくは１９８８年の教養系という新課程の設立、２０００年の教育組織再編を経て今日に至っており、新たなうねりの中に更なる発展を続けています。本号で紹介された各界での卒業生や会員の方々のご活躍、既に活動を行っている辞雍会支部、さらに新しく設立され活動を開始された辞雍会支部等々、様々な繋がりが東京学芸大学の発展の大きな原動力になっているものと確信いたします。

　２００６年に改正された「教育基本法」では、「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」という表現が注目されます。また、第13条「学校、家庭及び地域住民等との相互の連携」も重要な観点となります。新しい教育と文化の時代を迎え、この実現に向けては、辞雍会のもつ特長を十分に活用すべきであると考えています。

　２００３年に設立された辞雍会も来年は設立10周年という節目の年を迎えます。新たな飛躍に向けて動き出さなくてはなりません。機関誌「辞雍」、辞雍会ホームページの果たす役割も極めて多大であると考えています。今後とも辞雍会の活動、ならびに東京学芸大学の情報を発信し続けてまいります。そのためにも卒業生や会員の皆様の交流や活動を通しての様々な情報を辞雍会にお寄せいただけますことを願っています。（広報部長・二宮修治）

辞雍会 機関誌「辞雍」第9号

発行日　2012年（平成24年）11月25日
発行責任者　鷲山恭彦
編　集　辞雍会広報部
事務所　〒184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1
東京学芸大学 20周年記念飯島同窓会館内
電話・FAX　042-321-8820

辞雍会ホームページ
http://www.u-gakugei.ac.jp/~dousou/
辞雍会 Email　dousou@u-gakugei.ac.jp

印　刷　株式会社 学校写真
〒274-0071 千葉県船橋市習志野 4-7-6
電話　047-493-9581

「辟雍」 第9号　東京学芸大学 全国同窓会 辟雍会機関誌

Copyright © 2012 Hekiyoukai All Rights Reserved. Painting: © 2009-2012 Haruka Ochi